

Vol. **180** 2022.新春

# 木

MOKUME

特集  
I

年頭所感

特集  
II

新春対談

特集  
III

【第24回】  
作文コンクール表彰式

途やれることのない日々、  
毎日バースタートです。



一般社団法人

日本木造住宅産業協会



## CONTENTS

### 木 芽 Vol.180

新春号  
令和4年(2022年)  
1月28日発行

	折々のひとひら	1
特集I	年頭所感	2
特集II	新春対談	8
特集III	第24回 木のある暮らし 作文コンクール表彰式をオンラインで開催	17
木住協NOW	『こうすればできる「純木造3階建て事務所建築」中大規模木造の検討』の発刊	26
FOCUS	WOODRISE 2021 KYOTOに木住協も出展参加	27
木住協NOW	自主統計分析等に関するオンライン記者報告会を開催	31
木住協NOW	「令和2年度自主統計および着工統計の分析報告書」まとまる	33
連載	日本の世界遺産探訪／東京都 小笠原諸島	35
	改正木材利用促進法施行記念講演会・シンポジウム	37
	全国のテストセンターで木造HIC資格試験を実施	39
木住協NOW	兵庫県・神戸市との応急仮設住宅の建設に関する協定締結について	40
	新規会員紹介	41
	編集後記	42
連載	木の匠 Historia／旧岩崎彌之助別邸和館(神奈川県箱根町)	43

『寅・虎』・・・両手で矢がらを正す姿・トラの姿

新年 おめでとうございます。



昔ばなしに出てくる、一休さんの頓知話には、室町幕府三代將軍・足利義満が、「この屏風に描かれているトラが、夜な夜な出てくるので捕まえてくれ。」と、一休に話を持ち掛ける一話がある。この『屏風の虎退治』で、一休は、ハチマキ姿で縄を持ち構え、「では、まずは、屏風からトラを出して下さい。」と、切り返したという言い伝え。

百獣の王、トラ。トラは、揺るがぬ王者としての存在感と共に、崇敬に値する霊獣として伝承されたり、権威の象徴や、呪物としてトラ皮を用いられたり、時に、あがめられる存在となることもある。この有形無形という二極の世界を、トラは、一休さんに捕えられぬよう、行き来しているかのような立ち廻り。

さて、漢字『寅』の成り立ちは、「矢がらの曲直を、両手で正す形」とあり、この漢字が、左右対称であるのは、矢と両手の象形から成る故。ここに於けるウ冠部分は、矢の先端部分の象形で、それ以降の画は、それを、真っ直ぐに正そうとする両手の象形。また、十二支名として漢字『寅』を、トラと読ませる用法は、「寅」という漢字としての形が出来上がっていた後で、「トラ」という音を後で充てた、つまり、「仮借」である。

一方、漢字『虎』は、まさに、トラを横から見た姿の象形。古へより、様々な文化圏でもそうであったように、東アジア文化圏でも、その存在感は図象化するに値した存在だった事が、推し量れる。

人類が、こころばらく捕え辛い疫病。

その手ごわい立ち廻りを、今年こそは沈め、

世界中で、安寧を叶えられればと念じている。

書家・文字文化文筆家 宇佐美 志都





# 年頭所感

新春を迎え、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。

2020年初頭より拡大した新型コロナウイルス感染症は、2021年も続き全世界の社会・経済に甚大な影響をもたらしました。日本国内においては、ワクチン接種が進められたことにより感染者数は比較的抑えられていた一方で、新たな変異株の感染拡大もあり、引き続き感染拡大防止策の徹底が求められます。

新型コロナウイルス感染症に罹患された方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、日々最前線で尽力されている医療従事者の皆様に心から敬意を表し、深く感謝申し上げます。

昨年の住宅業界を振り返ると、コロナ禍の拡がりに端を発し、世界的な木材需給バランスの崩れや海上運賃の上昇から生じた「ウッドショック」、半導体など各部品の不足による住宅設備機器の供給遅延など、住宅着工時期や工期が遅れる事象もありました。このような問題は根本的には今も解消されておりません。国の政策も相俟って、新たな生活様式に対応するための住宅需要や高まりつつある購買意欲に生産、供給が追いつかず、今後も需給がひっ迫する状況が続くと予想されます。厳しい状況下、業界一丸となって、諸々の課題に向き合っていかなければなりません。

近年、世界中で自然災害が激甚化・頻発化し、気候変動への対応が喫緊の課題となっています。世界の温室効果ガスのうち建設セクターからの排出が約4割を占めると言われており、脱炭素社会への移行には、建設業界におけるCO<sub>2</sub>排出削減が大きな責任を担っています。

岸田首相は、未来を見据え、「成長と分配の好循環」と「コロナ後の新しい社会の開拓」をコンセプトに、「新しい資本主義」の実現に取り組むこととしており、まちづくりにおいても脱炭素化が急務になっています。

今般、税制改正において、省エネ性能が高い住宅の取得に対する優遇措置を設けた住宅ローン減税が講じられました。また、省エネ性能に応じて補助額を決定する「こどもみらい住宅支援事業」も始まります。木はCO<sub>2</sub>を吸収し炭素を固定しており、木を使った木造住宅の普及はCO<sub>2</sub>削減に大きな貢献となります。国の施策を後押しに、新築やリフォームにより高い省エネ性・レジリエンス性を備えた木造住宅の普及を図り、住宅分野での脱炭素化を推進していきたいと思えます。

消費者が安心して購入できるように、新築住宅においては、住宅性能表示制度の活用や維持管理を推進し、既存住宅においては、適切なリフォームや履歴情報等を開示するなど、建物価値を的確に評価する流通市場の環境整備も重要課題です。

さらに、働き手の高齢化や技能者不足も深刻な問題となっています。建設業の担い手確保につながる働き方改革、処遇改善、生産性向上のために、建設キャリアアップシステムの普及活動なども実践し、誇りをもって働ける環境整備が、特に中小事業者の持続可能な経営には重要と考えています。

昨年10月には日本で初となる「WOODRISE 2021 KYOTO」が開催されました。持続可能な中高層木造建築物の発展を目標とするこの国際イベントで、世界中の知見を多くの方が聴講され、脱炭素社会の実現を目指す潮流を直に感じることができました。当協会としてもブースを出展する等このイベントに多くの会員と積極的に参加しました。コロナ禍により延期となった社交行事やテクニカルツアーは、本年5月東京にて「BUSINESS SESSION」として開催される予定です。

また、昨年10月には「脱炭素社会の実現に資する等のための建築物等における木材の利用の促進に関する法律」が施行され、公共建築物だけでなく民間の非住宅の建築分野にも木造化・木質化の動きが加速していきます。当協会としても木の持つ可能性を十分発揮できるように構法の技術開発に取り組み、その成果を会員に提供するとともに、木の価値を世の中にも発信してまいります。

さて、当協会は、木造軸組工法による住宅及び建築物の普及・発展を目的として、36年にわたり、様々な事業活動を行ってまいりました。現在、全国9支部において、地域の特色を生かした活動を行っており、地方公共団体との連携も重視し、地域に貢献する住宅・まちづくりを進めています。本年は中国支部(仮称)の立ち上げも予定しており、これにより全国を網羅することとなります。引き続き、地域に密着した会員サービスを充実させてまいります。

全国各地で大規模災害のリスクが高まっている中、災害時における木造応急仮設住宅の建設を重要課題に位置づけ、全ての都道府県との協定締結に向け取り組んでいます。現在17都府県と締結していますが、今後も有事に備えて地方公共団体との連携を密にし、円滑に対応できるよう体制整備に努めます。

末筆になりましたが、本年が皆様にとってより良き年となりますよう祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

(一社)日本木造住宅産業協会  
会長 市川 晃





## 北海道支部

支部長 中田 和仁



新年あけましておめでとうございます。

年頭にあたり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

会員の皆様におかれましては、新たな年を迎えられ、つつがなくお過ごしのこととお慶び申し上げます。

また、北海道支部の理事並びに会員の皆様には、活動が制限される中、ご理解とご協力を賜り改めて感謝申し上げます。ありがとうございます。

昨年は一昨年に引き続き新型コロナウイルスの影響で会員企業様のみならず、多くの企業活動に影響があったと思います。建築・住宅業界においては、ウッドショックに始まりアイアンショック、合板不足、住宅機器不足など、まさに未曾有の一年だったと思います。

その状況下で当支部の活動も大きく制限されました。これまでの多大な影響を鑑みますとコロナ禍以前の社会に戻ることは難しいかもしれませんが、一日も早く支部活動が再開されることを切に願うばかりです。

今後の見通しとして、我々住宅業界も取り組まなければならない政策課題が多くあります。緊急かつ重要な課題としてあげられるのがSDGsです。日本では2030年度の温室効果ガス排出量を2013年度比で46%削減するとしています。二酸化炭素実質ゼロ

の達成期限は2050年です。住宅業界としては、ZEHやLCCM住宅など環境に配慮した省エネ・創エネ住宅の普及促進を早急に実現していかなければなりません。また、国内のみならず世界的に想定外の地震や自然災害が起きており、SDGsの中では「レジリエント」という言葉で耐性、復元力、持続性を求めています。レジリエンス住宅の開発普及でこれらの課題に寄与していかなければなりません。ユーザーに対しては、在宅時間増加による居住空間の多様性などニーズの変化にも対応することが求められます。今後は益々、一企業での取組みから業界全体や地域一体となった取組みが重要になると思います。

「ピンチは最大のチャンス」を私自身肝に銘じ、北海道支部として今後とも会員企業様にとって有意義な組織であり続けられるよう取り組んでまいりますので変わらぬご支援賜りますようお願い申し上げます。

本年も色々な事があると思いますが、皆様にとりまして明るい良一年になりますように心よりお祈りいたします。本年も一年よろしく願い申し上げます。

## 東北支部

支部長 櫻井 哲典



新春を迎え、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。

旧年中は、東北支部の運営につきまして、多大なるご支援、ご協力を賜りまして心より感謝申し上げます。

また新型コロナウイルス感染症に罹患された方々に心よりお見舞い申し上げますと共に、日々医療の最前線でご尽力されている医療従事者の皆様に心から敬意を表し、深く感謝申し上げます。

昨年は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行の影響により近代オリンピック史上初めて前年夏の開催日程から一年延期を行い、3月25日東京五輪の聖火リレーが福島県のサッカー施設、Jヴィレッジからスタートしました。緊急事態宣言の発令に伴い無観客開催となりましたが、競技に臨む選手の姿や国を越えてお互いの健闘を讃えあう選手の姿は、パンデミックの渦中で多くの希望と勇気を頂きました。

また東日本大震災の発生から10年となり、復興も進みましたが心の傷を抱えられた方々も多くおられます。その方々に寄り添いながら災害を伝承して減災に努める事が我々の使命と考えます。2月13日は福島県沖を震源とする最大震度6強の地震が発生しました。3月20日は宮城県沖を震源とする最大震度5強の地震が発生し5月1日にも宮城県沖を震源とする最大震度5強の地震が発生しました。台風においても7月28日に台風8号が異例の進路をたどり宮城県石巻市に上陸をし、観測史上初の出来事となりました。これらの全国各地で発生している激甚災害に対して、あらためて地震や風水害から身を守る防災住宅の普及と木造応急仮

設住宅の建設を重要課題として東北全県との協定締結を推進してまいります。

一方で、パンデミックは歴史的にみても産業構造の変化をもたらします。

オンラインによる国際会議も頻繁に開催され経済発展や紛争解決の対話など様々な場面で活用されております。我々の業務に於いてもオンラインを活用し一度に多くの方々に参加してもらう事が可能となり効率が格段に上がりました。またCOP26の成果にも見られるように各国の脱炭素のながれも加速され2050年までのカーボンニュートラルを目指して、2030年までにEVやAIに代表されるような産業が大きな発展を遂げる可能性があります。我々のたずさわる木造建築物も脱炭素に対して有効な手段であることは認識されております。ウッドショックの経験も国産材の利活用を促進する機会となりました。昨年10月15日～10月17日に開催されたWOODRISE 2021 KYOTOに参加させて頂き、中高層木造建築物の技術力と国内及び諸外国の関係団体・企業との交流を深める事ができ大きな可能性を再認識したところであります。

これからも、木の可能性を追求する支部として発展をして参ります。

末筆となりましたが、本年が皆様にとって実り多き一年となります事を心より祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。



## ❀ 神奈川支部 ..... 支部長 中鉢 悟

新春を迎え、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。

旧年中は皆様よりたくさんのご支援ご協力を賜り有難く厚く御礼申し上げます。おかげ様で無事に新年を迎えることができました。

さて、昨年はコロナウイルスが経済に影響を与え続けた年で新たな変異株の出現もあり、まだまだ終息宣言まではいかない状況にあります。そのような中、ウッドショックと呼ばれる建築資材価格の高騰等もあって昨年9月末の時点で木材・木製品・林産物全体の輸入価格が前年末比で69%上昇しましたが、本年はサプライチェーンの正常化など一刻も早い経済回復が期待されるところであります。

一方、明るい話題としては、無観客試合になりましたが昨年延期された東京オリンピック・パラリンピックが開催され、アスリートの活躍により世界中に感動と勇気が発信されました。メイン会場の新国立競技場には47都道府県より調達された約2,000立方

メートルの木材が使用されております。具体的な形で脱炭素社会実現のため木材が使用されている事は、持続可能な社会実現例として当支部も大いに勇気をいただきました。

新国立競技場のみならず、昨年「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」が「脱炭素社会の実現に資する等のための建築物等における木材の利用の促進に関する法律」へ変更された事により、より多くの建築物への木材利用が推進され、会員各社の皆様のご活躍の場がさらに広がるように一致協力して取り組んでいきたいと思っております。

2022年が会員各社の皆様にとって実り多い一年になりますことを心より祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。



## ❀ 静岡県支部 ..... 支部長 江井 政仁

新年明けましておめでとうございます。

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。昨年中は静岡県支部をお支え頂きました、全ての方々に厚く感謝申し上げます。

2021年は新型コロナウイルスに始まり、通常な生活が出来ず耐え忍んだ1年でありました。そのコロナ禍の中、様々な諸問題を抱えながら、開催した東京オリンピック、パラリンピックにおいて、日頃鍛え抜かれたアスリートの皆さんには感動、勇気、そして最後まで諦めない姿勢を与えて頂きました。私個人的には、女子ソフトボールの金メダルを争ったアメリカ戦は手に汗を握りながら声援を送りました。

このオリンピック、パラリンピックの開催には日本の素晴らしい所をたくさん世界に届ける事も出来ました。日本国民として大いに誇りに感じます。

我々の住宅産業に目を移しますと新型コロナウイルスにおいて、今までに経験をしたことのない事ばかりでした。

人間同士の密を避けるため、集客活動の一環であるイベント活動の中止。住宅建設を考えられているお客様との出会いを妨げられ、営業活動には皆さんご苦労をされました。

直接面談できず、画面上での交渉。元々実際にお会いして熱意を示して、ご理解を頂く活動が出来ませんでした。

その上、木材の価格の高騰が始まり「ウッドショック」という言葉まで出始めました。又石油価格の変動により様々な建材類の価格高騰、半導体を有する設備商品の出荷の遅延など我々の活動が妨げられる事態が次々と襲いかかってまいります。

この価格高騰は本年を迎えるにあたって未だ変わらない状況が続いております。

静岡県支部の活動を振り返ってみますと、結果何も出来ません

でした。当支部の活動の中心としておりました、支部会員皆さんが持ち寄り行う、「合同見学会」こちらも、集客活動として中止の判断を致し、新しいご縁を結ぶことが出来ませんでした。

今年の活動としてはやはり、「合同見学会」の開催です。

静岡県支部の合言葉である、「実利ある活動」を図ってまいります。昨年、当地区の熱海市を襲った土砂災害も大きな被害が発生いたしました。この災害時にかねてから協議しておりました「応急仮設建物建設」の要請の発令が報道されました。

しかしながら、避難人数等の見直しで、正式な要請は出ませんでした。

近年、全国を襲う地震災害。各地でいつ大地震が発生するかも、分からない日本列島。その際に静岡県よりいつでも要請されてもいい備えを整備することも急務になってまいりました。

2022年、新年を迎えるにあたり、私個人的ですが「年男」です。虎が静岡じゅうを見渡し、仲間と常に共存出来ていくよう、私自身努めてまいります。

大きな問題を抱えたまま、迎えました2022年。静岡県支部として、支部会員とともに明るい未来を描き、活動してまいります。

結びに、静岡県支部をお支え頂いております全ての方々、本年もご指導の程宜しくお願い申し上げます。





## ❀ 北陸支部

支部長 内海 健一



新年明けましておめでとうございます。

いつも、支部の運営にご支援ご協力賜り、本部と支部会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

昨年も新型コロナウイルスがおさまらず、支部の活動にも支障をきたすこととなりました。

一方でワクチン接種が進み、感染者が少なくなり緊急事態宣言がひとまず終わるなど、一部明るい兆しも見えてきたのですが、オミクロン株が新たに出現して、まだまだ完全なる収束が見えていません。そんな環境の中で、飲食業界でも、飲食配送サービス「出前館」や「ウーバーイーツ」のような新たな業態も出現し業績拡大しています。消費者の変化にいち早く対応

した実例です。緊急事態宣言解除後も「在宅ワーク」や「時差出勤」など変化した働き方も今では定着しつつあります。それに応じて、家づくりにも変化が見えています。

例えば、60㎡3LDKのマンションにワークスペースを設置するなど、戸建住宅はもちろん、集合住宅まで対応していることも一例です。また、暖冷房を含めた空気環境対策も次々に打ち出しています。ここで、考えておきたいことは、コロナに向けた対応がきっかけであっても元どおりに戻るかという点です。新しい暮らし方を身に着けた消費者は戻れないのではないかと思います。木住協本部の援助を得ながら支部会員が北陸の風土にあった快適な進化した暮らし方を提案できる家づくりを検討するなど勉強会を開催できればと思います。災害時の応急仮設住宅建設においても、コロナ禍での提案をしていきたいものです。本部にはそのための、具体的支援をいただきたく、よろしくお願いいたします。

最後に、会員皆さまにとって、健康で幸せな一年になるよう祈念して、年頭所感とさせていただきます。

## ❀ 中部支部

支部長代行 富山 拳男



新年を迎え、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。

旧年中は中部支部の運営につきまして、多大なるご支援、ご協力を賜り心より感謝申し上げます。

昨年はコロナウイルス感染症の影響が治まることなく、感染状況は落ち着きを見せたかに思われましたが新たな変異株が見つかるなど予断を許さない状況がいまだに続いています。

経済も「おうち時間」をキーワードにする商品など、一部の業界で売上げが伸びてはいるものの、全体では低迷を続け、住宅業界ではいわゆるウッドショックによる木材の価格高騰や不足が生じ、住宅設備メーカー様におかれましては半導体不足により機器の製造が計画通り進まないことによる建築現場への納品のご苦労など、着工からお引き渡しに至るまで様々な心配事が発生した一年となりました。

しかし一方では脱炭素、カーボンニュートラル、SDGs、など社会で省エネルギーや環境保護の話題が日常的になりつつあり、また中大規模建築物の木造化の促進、木材利用の促進に関する法律の改正もあり、その要求にこたえる資材としての木材が見直されることも増えてきております。今年はこの流れを追い風にして、木造住宅に住むことがステイタスになるような時代のスタートとなることを期待いたしております。

中部支部では勉強会・研修会などの行事の中止が続いておりましたが、今年はWEBの活用と感染対策の徹底を行い、社会情勢を見極めながらではありますが事業計画に沿った活動をおこなっていけるよう努力いたしてまいります。また引き続き南海・東南海地震等、有事に備えた木造応急仮設住宅の取組みの推進を図ってまいりたいと思います。そのためには会員の皆様の連携とご協力が不可欠であります。皆様のご指導ご鞭撻を頂戴しながら、安全性や耐久性、環境に配慮した住宅の普及に努め、「木の良さ」を伝える活動に邁進いたしますので何卒よろしくお願い申し上げます。

末筆となりましたが、新年を迎えるにあたり、なお一層のご支援・ご協力をお願いしますとともに本年が皆様にとって実りの多い良き年となりますことを祈念し、ご挨拶とさせていただきます。



## ❀ 近畿支部

支部長 古川 浩



新年明けましておめでとうございます。旧年中は、近畿支部の運営につきまして皆様の多大なるご支援ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

昨年引き続き新型コロナウイルス感染症の世界規模での感染が続きました。ウイルスの脅威に対して、企業では基本的な感染予防対策に加え、テレワーク・リモート活動等コロナ後の新しいライフスタイルも模索されています。夏場以降はワクチンの集団接種が進み、感染者数も大幅に減少しつつありますが、年末にかけて更に変異株ウイルスが発生するなど未だ予断を許さない状況です。

そのような中8月には、東京オリンピック・パラリンピックが開催されました。コロナ禍での状況下で難しい運営ではありましたが、新種目を含めてメダルラッシュが続き大いに盛り上がりました。

このコロナウイルスの影響は我々の生活に地球規模で大きな影響を与えました。ひとつはアメリカ合衆国や中国の戸建て需要の高まりによるウッドショックの影響です。これにより国内の戸建住宅の構造材不足と価格高騰が住宅業界の大きな問題となっています。もうひとつは東南アジアのコロナによるロックダウンに伴う工場の操業停止の影響で、給湯器等の部品供給が滞っていることです。

克服すべき課題は山積しておりますが、木造住宅産業界の環境に対する転換期と捉え、近畿支部といたしましても、会員各社様との連携を密にし、改善に向けて相互協力をしてい

たいと思います。

近畿支部の昨年度活動につきましては、10月に中高層木造建築物の発展のための国際会議である「WOODRISE 2021 KYOTO」が京都国際会館で実施され、隈研吾氏の記念講演やテクニカルワークショップが開催されました。また、作文コンクール近畿ブロック賞については、運営委員会を開催し作文の選考を行いました。この作文を読むことを楽しみにしている委員も多く、力作揃いの応募作品に感動しながらの選考となりました。

応急仮設住宅の建設協定につきましては、近畿支部では和歌山県・大阪府に次いで3府県目となる、兵庫県・神戸市と基本協定を締結できる運びとなりました。本部の皆様方のご協力を仰ぎ取り組みが前進いたしましたこと、心より御礼申し上げます。今後、昨年からの協議を進めております京都府との協定締結に向けて進めて参ります。

昨年も支部活動に制限のある1年となりましたが、本年につきましては引き続きコロナ感染対策に万全を期するとともに、会員の皆様方と例年以上の活動に取り組んで参る所存でございますので、より一層のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

末筆となりましたが、会員企業各社様の益々のご発展と本年が実り多き一年となりますことを祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

## ❀ 四国支部

支部長 栗原 健志



新春を迎え、謹んで年頭のご挨拶申し上げます。

依然として新型コロナウイルスの心配が続く中、様々な影響が出ている皆様には心より、お見舞い申し上げます。また、人命救助のためにわが身も顧みず奮闘されている医療従事者の皆様には深く感謝申し上げます。また、ウッドショックを発端とした、建築資材価格高騰の影響も大きく受けた1年となりました。

さて、2021年の四国地方を振り返ってみますと、特に大きな災害もなく、コロナウィルス感染症を除けば比較的平穏な1年だったかと思えます。とはいえ、いつ来るかわからない災害に対し、減災防災の観点から、日々備えをしておく事の大切さを痛感しております。四国支部としてもできることはまだまだ沢山ございますが、支部会員の皆様と一緒に地域の安全と安心の為に尽力していきたいと考えています。

コロナ禍の中、住まいに対する考え方も大きく変わった1年だった様に感じます。いままでも健康へ配慮した住まいという事で断熱性・気密性等の性能面での機能アップに取り組んで参りましたが、コロナ禍後の住まいにはさらなる機能性が必要になってきたように思います。

『ポストコロナの住まい』=『健康』というキーワードがより一層住まいに求められており、例えば今では当たり前となった、在宅ワークやオンライン学習がありますが、ちょっと仕事

ができる書斎スペースから長時間の仕事をする書斎ルームに変わった事。書斎ルームとなると、快適な滞在性、その部屋からの眺望、換気対策、オンライン会議などがあるため顔映りが良くなる照明提案など様々な機能アップと提案力が必要になってまいりました。また、仕事をする上での遮音性なども重要になり、住まいに求められるものが非常に多くなっています。

カーボンニュートラルの観点からも、上記のような健康性にプラス省エネ機能を大きく向上させた住まいの提案がこれからは必要になってきたと実感しています。これからも、時代にあった、木造の住まいの提案に皆様と一緒に取り組んでいきたいと思っています。

最後になりますが、四国支部発足以来、コロナ禍により、活動が制限されて参りました。本年こそは、コロナウィルス感染症を克服し、会員の皆様と共に様々な活動に取り組んで参りたいと考えています。会員の皆様には、より一層のご指導とご鞭撻を賜ります様お願い申し上げます。

本年が会員各社皆様にとって健康で実り多き年となることを祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。



## 九州支部

支部長 脇山 章治

新年あけましておめでとうございます。

2020年1月中国武漢で発生した新型コロナウイルスによる感染はたちまち世界中に広がり、日本国内でも2月3日「ダイヤモンド・プリンセス号」、その後の札幌雪まつりで多くの感染者が出ました。感染拡大の第1波が始まった直後の4月7日政府は7都道府県に緊急事態宣言を発令(第1波)、その後1年半、第5波までパンデミック(世界的大流行)を繰り返し、感染者の拡大に歯止めがかりませんでした。そのような中で2020東京オリンピック・パラリンピックが2021年7月23日より開催されましたが、大半の競技が無観客となるなど異例づくめでした。ところがオリンピック後の8月20日を頂点に、国内感染者数は大きな波が引くように一気に減少、第6波の発生を心配しながら毎日を過ごしている状況です。

2016年4月、2度にわたる震度7の地震に見舞われた熊本県は震災から昨年で5年、復興と同時に中期ビジョンが示され、熊本は未来に向けて着実に歩みだしました。復興に関しては阿蘇へのアクセスルートはJR豊肥本線、国道57号、阿蘇大橋全てが回復しました。熊本城も天守閣の修復が完了、被災した熊本空港も2023年新旅客ターミナルビルが完成予定です。中期

ビジョンは5つの安全保障としてまとめられました。「経済の安全保障」では台湾の世界的半導体メーカー TSMCが菊陽町に進出し2024年12月生産開始することが決まっています。地盤が強固で半導体に必要な水が豊富にあることが選定理由にあったようです。「感染症に対する安全保障」ではKMバイオロジクスがコロナ対策の不活化ワクチンの開発に取り組んでいます。その他「災害」「食料」「環境」の安全保障と合わせ、熊本県では単なる復興ではなく「創造的復興」が進んでいます。

第24回小学校作文コンクール「木のある暮らし」中国・九州・沖縄ブロック賞の低学年の部は岡山県の小学2年生の作品「木のあるしごととおとうさん」で、コロナ禍、工務店で仕事をしているおとうさんが作る家でみんなが快適に過ごし、幸せになってほしいという作品でした。高学年の部は福岡県の小学6年生「私の宝物」で2020東京オリンピック卓球にちなんで、自身が卓球部員として使っているラケットに着目、メーカーに問い合わせで合板の組み合わせなど解明した作品でした。両作品とも時代を捉えた素晴らしい作品でした。

九州支部活動はコロナ禍で制限されていますが、今年こそは支部活動を再起動させ、地域の皆様にお役に立ちたいと思っています。本年もよろしくお願いします。







## 特集Ⅱ



# 新春対談

市川晃  
会長



国土交通省  
淡野博久  
住宅局長



国を挙げて提唱されてきたDX(デジタルトランスフォーメーション)推進は、新型コロナという未曾有の突風が吹き荒れた事で一気に加速しました。また、DXとも密接な関係がある、働き方改革時代を迎え、住宅産業に求められる態様もまた、暮らし方の変革、脱炭素社会への貢献、そしてストレス社会の軽減といった観点が次第に重要になり、様変わりの一途を辿ります。そんな時代背景は、木造業界にとっては、大きな追い風になるものと期待されています。

今号では、国土交通省の淡野博久住宅局長をお招きし、「変わりゆく住生活産業」について、市川晃会長との新春対談の様子をご紹介します。



## 新型コロナ禍における住宅の変化

**市川** 新型コロナという未曾有の疫病流行を経て、住宅政策はどの様になってきたのか、また、アフターコロナ時代にどう変わっていくのかお教えいただけますでしょうか。

**淡野** 住まいの需要が非常に多様化しました。中でも一番大きいのは、住まいに滞在する時間が非常に長くなって、相当数の方が今の住まいを見つめ直されるようになった。それは音の問題とかスペースの問題とか、色々な理由があるのですが、その中から賃貸住まいから持ち家へ、あるいは持ち家のリフォームという流れが起きているように思います。そのニーズにお応えできる環境等整備を意識しています。こうした流れは住宅業界にとっても少なからずビジネスチャンスになると思います。

テレワーク化が進み、都心近郊から郊外に移る人が増える兆候もありましたが、やはりフェイス・トゥー・フェイス・コミュニケーションでないと、新しいアイデアや発想が生まれなかったり、テレワークによる個別作業だけでは効率をなかなか上げにくい面もあったりして、すべてをテレワーク化するといったことはなかなか難しいようです。もう都心に住まなくていいとか、極端に居住地の選択が変わるところまではいかないように思います。

そうした背景を踏まえつつ、今後ますます多様化する住宅需要など住宅政策へのニーズの変化を見極めていかなければならない。今は、そういう段階ですね。

**市川** 住宅需要の変化について言えば、例えばリモートワークをしようにも、今の家では子供が走り回っていて仕事にならないので、レンタルブース、レンタルオフィスのようなところで仕事をされる方が出てきている。そうすると、我が家でリモートワークできるような環境が望まれますよね。あるいはステイホーム時間が長くなれば、その分、我が家における快適性やアミューズメント性を求める人も増えてきています。

ですから我々住宅の造り手側も、今までと同じような家の提案から、もう少し多様性のある提案を意識しないといけない時代になってきたと感じます。

**淡野** 郊外の敷地需要も増えているように思います。家族みんなが家で食事をする機会が増えてきて、料理も家族みんなで作ったり、たまには庭でバーベキューもしたい、それにはやはりもう少し広い家がいいとか、庭付きの戸建てがいいなどかと思って郊外の土地を探すといったことなどがあるようです。

**市川** そうですね。朝、家族全員が出ていて、夜もそれぞれ帰宅時間がまちまちだったりして、ただ家族が同じ屋根の下で寝ていると

というような家のあり方から、家族と一緒に過ごす時間が増えて、家が本来の姿に戻ってきているような気がしますね。

**淡野** 日本も、ようやく西洋のような家族のあり方、家のあり方に近づいてきた感じがします。長いステイホーム生活を経験して、自分の住まいに滞在する時間が増えて改めて我が家を見回してみると、今まで気づかなかった色々な改善点があるなど気づかれた方も多いように思います。そういう意味で今般の新型コロナ禍の状況は、皆さんが家に必要な付加価値を再度見直すきっかけになった面はありますね。

## 和室はどうなっていく？

**淡野** 話は変わりますが、そのように家族のあり方、家のあり方が変化していく一方で、我々は“和室”が今後どのようにしていくのかに注目しています。昔は床の間付きの和室や続き間があって、そこにお正月とかお盆とかに親族一同が集まったり、冠婚葬祭なども行われるなど地域とつながる接客空間として機能し、さらに畳数・坪単価は基本単位となっています。そういう日本人の根底にあった、言わば木造文化の象徴の一部が失われかけているという感じを持っています。

例えば『木のあるくらし作文コンクール』の応募作品においても、和室のない家で育っているお子さんが増えてくると、木造文化が感じられるような作文が減ってしまうでしょう。木造文化を継承していく上で、和室という機能を持った家を次世代にどう継承していくかという非常に重要な課題についてぜひ、会長にお伺いできればと思います。

**市川** やはり和室っていうのは多用途なんですよ。あるときには寝室にもなるし、それから客間にもなるし、そういう意味では和室があると非常に便利なんです。ただ都心のような限られた間取りですと、どうしてもテーブル・椅子中心の生活となり、和室が追いやられているというのが現状だと思うんですよね。

ただ今回コロナで自宅で過ごす時間が増えてくると、昼寝をするのに寝室のベッドでゴロ寝というよりも、やっぱりリビングに近い和室でまどろんだり、くつろいだりできるという意味では、和室の価値が再び見直されてくるんじゃないかとは



淡野局長持参の参考図書



思うんですね。

**淡野** 家で靴を脱ぐ日本では、不衛生でないのに、今でも床に座って過ごす生活スタイルは結構根付いているんじゃないかと思っています。床でゴロゴロする事を想定して、意図的にカーペットを敷いたりする人もいますね。まだこたつは売られています。

そういう意味では畳は減っていても、まだ和室的な生活をしている人は少なからずいるので、日本人独特の靴を脱ぐ、家の中の床が非常に衛生的だという、海外とは違う文化を維持しているうちは和室が選好される可能性があると思っています。ですから、畳のいろんな効能、健康にいいとかそういう点もアピールしながら、できれば存続してほしいと思いますね。

**市川** 本当に畳はいいなと思いますけれども、畳を経験している子供たちが、都会では段々と減ってきています。近年のマンションは、和室のない間取りも多くなってしまって、今、畳ニーズに応える形では、和室でなく、置き敷き畳が出てきています。畳をどこから持ってきてゴロゴロって横になる。それだと、柱の見えるいわゆる「真壁」和室の設えにする必要がなく、コストが大きく変わりません。つまり畳部屋を造ること自体の問題はないと思います。ただ本来の「真壁」和室の無垢の柱を触ることが、自宅ではほとんどなくなっているのは残念です。お客様に、和室なり畳部屋を使ってもらえるような提案という部分ではちょっと不足しているのかもしれないですね。

それでも、旅館だと和室は人気があるんです。やはり都会に住んでいる皆さんは、旅行へ行くとホテルでなくてやっぱり旅館の和室でゴロンとしたい。そういう意味では、和室は居心地のいい空間だという認識は、いまだに皆さん持たれていると思うんです。

**淡野** 旅館に泊まりたがるということは、小さい時から慣れ親しんだ木造文化という根底があって、柱とか床とか木が見えているところに慣れ親しんだ木の温もりを感じ、親近感を持つのでしょうか。

では小さい頃に木造体験することが全くなかったお子さんたちはどうなのでしょう。作文コンクールでも何か変化、傾向みたいなのはありますか？

**市川** 「おじいさんの家」などのタイトルで和室や木の柱について書いてくれた作品はありますが、最近は建物以外のも木製の家具や樹木、そして環境をテーマにしたものも増えています。昨年で24回目を数える作文コンクールのテーマも20年間続けた「木の家・こんな家に住みたい」を5年前より「木のある暮らし」に変更したことが影響していると思います。

**淡野** 和室で家族が川の字になって寝るという日本の文

化も、まだ残っていると思いますが、これからも残って欲しいですね。

## 住宅性能の向上と メンテナンスプログラムの重要性

**市川** 次に、住宅の性能についてお伺いしたいと思います。戸建ての新築需要を促進する要素として、リセールバリューの担保という観点も肝要だと思いますが、今まで以上に良質なストックの形成という観点では、ZEHも含め住宅の機能・性能を高めていくことに相当舵を切られていると思うのですが、その辺りの手応えはいかがでしょう。

**淡野** 性能という面では、かつては耐震性とか、密集地整備に関する安心・安全確保、そして近年だと台風・豪雨災害に対応するために屋根瓦が飛ばないようにするとか、窓ガラスの安全性を高めていくとか、あとは浸水リスクのあるエリアでは特に注意して対応していただくとか、また高齢化社会に対応すべくバリアフリー化など、どちらかというに住まう人自身の安全・安心を柱とした方向でやってきました。

しかし近年は、それらに加えて世界的な気候変動への対策などが急務になってきており、住宅政策の面では、持続可能な社会づくりという観点を良質なストック形成と絡めて一緒に進めていく必要があります。令和4年度税制改正において、住宅ローン減税も、省エネ性能に応じて借入限度額に差を設けるなど、環境性能の優れた住宅への誘導機能を強化する方向に舵を切ったところです。

**市川** 本当に住宅ローン減税の仕組みは、今まで以上にその点が強調された形になってきていますね。

**淡野** これまでの住宅ローン減税の借入限度額は、一般住宅は一括りで4000万円、長期優良住宅と低炭素住宅だと5000万円という非常に大雑把な一括りでした。

しかし今後は、省エネ基準に適合していない住宅は切り下げて3000万円にします。現行の省エネ基準に適合していれば引き続き4000万円。ZEH基準の水準の省エネ性能を満たしていると4500万円、長期優良住宅と低炭素住宅だと5000万円と。今回のローン減税は持続可能な社会づくりの方向への誘導をかなり意識して調整しました。

**市川** そのような誘導によって、高性能な住宅の割合が増えていくと、住宅性能をきっちり評価して流通するマーケットが確立されてくる。リセールバリューの向上ですね。そういう意味では、ライフタイムで住宅の価値をどのように考えるかということが非常に大切で、そのためにも新築時の性能基準というのが大変重要だと感じますね。

**淡野** あとやはり、ちゃんとしたメンテナンス体制があるかという安心材料も大切ですね。「スムストック」がインフィル



と躯体を区分けした査定方式で査定していて、最終的に査定に近い価格で取引が行われています。今後の既存住宅流通の活性化のためにも、しっかりした取組だと感じています。

**市川** それを支えていただく意味でも先般、木住協も登録事業者団体になった「安心R住宅」制度です。地域の工務店がこの「安心R住宅」制度を活用して、既存住宅を流通させようとする動きも増えるだろうと思うのですが、「安心R住宅」の普及状況はどういう感じでしょうか。

**淡野** まだ、およそ4500戸とかですね。既存住宅流通マーケットはだいたい年間16万戸。そのうちマンションと戸建てが8万戸ずつですけど、戸建ては、以前は10万戸を超えていたのに減少してきている。

せっかく性能が上がり、良いストックが蓄積されてきているにもかかわらず、戸建ての流通は減ってきてしまっていて、マンションは増えている。その要因のひとつには、マンションにおける管理の「見える化」が挙げられます。長期修繕計画とか修繕積立金をみんなが共同で作り、積極的に情報開示を行っている管理組合もあります。

一方の戸建ては、管理は原則的に所有者個人が対応し、履歴なども外からはわかりにくい面があります。「安心R住宅」によって、耐震性の担保があって、構造上の不具合や雨漏りが認められない、リフォーム実施済等で、何かあった時の相談体制の整備がなされているなど、中古物件に持たれていた、不安、汚い、わからないといったマイナス要素が払拭され、安心して取引してもらえる環境を整備したのです。



(一社)日本木造住宅産業協会  
市川会長

兵庫県出身。1954(昭和29)年11月生まれ。関西学院大学経済学部を卒業し、住友林業に入社。アメリカ・シアトルで山林調査に従事した。その後、営業本部国際事業部長や住宅本部管理部長、経営企画部長、取締役常務執行役員などを経て、2010年(平成22)年4月に代表取締役社長に。2020(令和2)年4月に代表取締役会長に就任した。2016年(平成28)年5月に第6代木住協会会長に選任された。(一社)住宅生産団体連合会の副会長、政策委員も兼務している。

**市川** 中古マーケットの健全化、安定化は戸建て新築需要喚起にも少なからず寄与するでしょうから、今後に期待が持てますね。

「安心R住宅」普及に向けての課題というところ、地域の工務店と地元の流通業者との連携をどういう仕組みでやっていけるのでしょうか。例えば工務店が「安心R住宅」に対応できる建物を一生懸命建てて、それを安心材料として流通させられるような地域の不動産事業者が必要というような。

**淡野** 例えば、大手住宅メーカーの中には銀行と組んで、残価設定ローンを提供しているところもあります。新築後15年経った後でも、その建物に一定割合の価値が必ず残っている前提で設定されるので、15年経ったら、その後もそこに住んで残価を返済し続けるのか、そこで売ってまた住み替えるとか、選択肢を増やせるわけです。そうすることで何十年に渡る巨額な住宅ローンへの抵抗感や、返済負担感のハードルを引き下げることが可能となります。住宅性能もメンテナンス体制も非常にしっかりしている住宅メーカーの建てる家なら、かなりの確率で、思惑通りの価格で中古マーケットで売れるということを、銀行が判断したから実現している制度ですね。

このように、中古マーケットでのリセールバリューを視野に入れて、新築時の性能やメンテナンスプログラムなどをしっかり担保できれば、金融機関によっては独自のローン設定などにも乗ってくれる可能性はあると思います。そうしてリセールバリューを認めて貰える建物が増えていけば、戸建てのリ

セールマーケットも充実してくるでしょう。

**市川** ということは、我々の会員工務店に置き換えれば、高品質な家を建てる事は元より、大切なのはアフターメンテナンスの仕組み、体制づくりということですね。これは業界団体としても今後検討すべき内容だとは思いますが、そうすれば、地元の銀行なり流通業者との良好な連携がある程度期待できるようになるだろうというわけですね。

## 今後の木造需要

**市川** 住宅着工件数はこの先の少子高齢化の進



展や建て替えサイクルの長期化等により、引き続き減少し続けるとされています。そうした中で、昨年(2021年)10月に、建築物の木材利用促進法改正が施行され、民間の非住宅建築物も木造化を進めていこうという方向に舵が切られたわけですが、今後さらに木造建築物の促進に向けた政策などをご紹介いただければありがたいと思います。

**淡野** まず、木造ニーズがすごく高まると思っています。SDGsとかESG投資などの関係で、企業が事業活動をさらに環境に配慮したものにしていかなければならないという流れが今後強まるでしょう。

例えば、最近ゼネコンとか設計事務所がよくおっしゃるのは、建築主がその建物を建てると、どれくらいCO<sub>2</sub>を排出することになるのかという質問をされることが非常に増えているそうです。様々な建設資材のサプライチェーンも含めたCO<sub>2</sub>排出量をデータベース化して、その情報をBIMなどに取り込み、設計段階から計測できるようにする取り組みなどが今後は必要になると思います。

そうした中で、林野庁が、建築物について木材の使用量に応じた炭素貯蔵量を表示するガイドラインを出して、木材が建築物に利用されている間、森林の吸収したCO<sub>2</sub>を貯蔵する機能がクローズアップされています。また、国際的な温室効果ガスの排出・吸収量の算定において、国産材由来の木材製品における炭素貯蔵量の変化量を森林吸収源としてカウントしていいというルールもあります。ただ国産材利用促進には、現状、流通面、コスト面でハードルがあって、今後は川上から川下に至る、林業、製材業、建設業などがしっかり連携した仕組みを作るよう調整が必要です。その実現がカーボンニュートラルの面でも、我が国における森林の健全化という面でも、建材の安定確保という面でも寄与します。

建物ごとの細かいCO<sub>2</sub>排出データ表示が進んでいくと、ますますそこを意識したお施主さんとか投資家が増え、国産材の利用促進にも弾みがつくものと考えています。

既に日本政策投資銀行による、GREEN BUILDING認証制度も2011年から始まっています。これは、「環境・社会

国土交通省  
淡野博久住宅局長

東京都出身。昭和39年(1964年)生まれ。1989年に東京大学大学院工学系研究科を修了(建築史専攻)し、建設省に入省。国土交通省住宅局建築物防災対策室長、市街地建築課長、建築指導課長(2018年建築基準法改正により木造関連防火規制を合理化)、大臣官房審議官等を歴任。係長・課長補佐時代に木造振興を担当。2021年7月に住宅局長に就任。一級建築士、工学博士。



への配慮」がなされた不動産を所有・運営する事業者を支援する認証制度で、その認証を受けた事業者には、優先的にハードルを引下げて投資を促します。木材を活用した不動産については、環境・社会貢献していると評価される仕組みになってきているので、木造業界にとっては、すごい追い風が吹くのではないかと私は思っています。

**市川** 一方で、戸建住宅に関しては少子高齢化などにより、住宅着工件数自体はこの先も減少していくと予測されていることから、非住宅の木造化への追い風に乘って、これまで木造住宅をメインに建築してきた事業モデルだけでなく、非住宅を含めた多様性のあるものに変革していかなければならないと思いますが、非住宅部門の今後の政策についてはいかがでしょう。

**淡野** 規制の合理化も必要になってきます。階数4以上の木造建築物に関しては、燃え代設計を導入しましたが、延べ面積3000㎡以上の木造建築物に対する規制につきましては、現状その燃え代設計、火災時の倒壊防止構造が使えないので、必ず区画をしないとイケない。それは設計上の制約が大きいとの声があるので、3000㎡以上についても区画せずに燃え代設計で全部建てられるよう、適用範囲を広げていきたいと考えています。

あとは高層部分と低層部分が組み合わさったような建物だと、低層部分だけ非耐火木造にすることが今はできないですが、構造上のエキスパンションジョイントみたいな考え方で、防火上でも一定の区画による別棟扱いの世界をつくれ



ば、高層と低層部を組み合わせられるのではないかと。また、中高層部分の中の1区画を耐火区画すれば、区画内のメゾネット住戸の内部や最上階の屋根・天井等は、普通の木造とすることができるんじゃないかと考えています。

また、今後木造化が一番進むことが期待されるボリュームゾーンである8階建てくらいまでのビルについては重点的に木造で建てやすくなる環境整備を進めていきたいと思っています。

そうした、これはできるんじゃないかというネタがたくさんあって、それを今いっぺんに審議会に諮っています。その上で速やかに国会に法案を提出できるよう準備を進めてまいります。

**市川** 本当にいいお話をお伺いできました。まさしくこれまで非住宅への木造普及のネックになっていた耐火について、規制が合理化される方向のようなので、そういう観点でも非住宅を含めて多様な対応力がある木造事業を行う上では非常に追い風ですね。実際、部材も耐火仕様が変わってきています。このような技術革新が進む中で、今後の規制のあり方等についてお話しいただきました。

ところで、都市部の密集地における16m以下の3階建について、これまでは木造としての競争力がなく、我々の会員工務店も3階建となると価格が高くなるため、お客様に負担をかけるということになってしまいますので、市場を伸ばし切れていない部分があります。その辺りの規制について今後どうなるでしょう。

**淡野** 都市部の密集市街地では準防火地域という都市計画に基づく規制がかかっている地域が多いですが、2018年の法改正により、準耐火にすれば建蔽率緩和が受けられます。建蔽率緩和を受けるために燃え代設計で建てるかどうかという判断になってくると思います。

**市川** 我々の協会でも、先般75分と90分の準耐火認定をとっています。住宅密集地の3階建エリアでも、木造がもっとシェアを伸ばせるよう、今後も耐震と耐火はいろいろな試験研究と認定取得を協会として進めていきますので、引き続きよろしくお願いいたします。

## 循環社会の構築に向けて

**市川** あらためて木造が注目され、今後のニーズも期待されている中ですが、昨年はいわゆるウッドショックがあって、少し足を引っ張られました。年が明けてようやく出口が見えてきたという感じはするのですが、現在の状況について今後どのような展望をお考えでしょうか。

**淡野** 方向としては2つあります。1つは川上・川下で連携して、川下の方々が、外材が安く手に入るようになったら、また外材の方を好んで選択するような行動を取るのではなく、国産材が安定的に求められ、流通されるような仕組みを作るといったことがあるでしょう。

実際に、川上側の事業者との間で長期の調達契約をされている工務店の方々もおられます。そうした仕組みづくりを





各地域で行うことを支援するため、令和3年度の補正予算において「地域型住宅グリーン化事業」として関連予算を計上していますし、新年度も引き続き支援したいと考えています。

一方で、国産材で競争力が比較的弱い分野は横架材とツーバイフォー部材ですが、その背景には、かつては多くの人工林が育成途上にあった中で、そこから出てきた間伐材などのそれほど太くない木を製材分野では芯持ち材としてそのまま柱に使うことができたため、柱材の国産材利用が進んだということがあります。ただ最近では、樹齢50年とか60年ぐらいの大径材が本格的に供給されてきているので、大径材であれば芯を外してその横の大きな角材を取ったり上手に活用してツーバイフォー部材とか横架材についても国産材で賄える道を開く可能性があると思います。

今後の方向性の2つ目は、そのような大径材製品の技術開発を通じて、大径国産材が製材分野で有効に活用される仕組みを作っていくことです。

例えば、国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所では、大径材の製材・乾燥技術の高度化のほか、大径材をより効率良く利用できるよう、丸太の段階で切り出した角材の強度を推定する技術の開発に取り組んでおり、今後の現場への導入が期待されます。

今は大径材があまり活用されないから、市場価値も低いので、加工する生産ラインもあまりないと伺っています。逆に、活用のメドが立ったらラインを組んでいただいて、大径材がちゃんと流通するようにすれば、外材に対しても競争力のある国産横架材ができるでしょう。そういう技術開発を含めて進めていくのが、解決策としてあると思います。

今後、林野庁や森林総合研究所と連携してやっていきたいと思っています。

**市川** 部材の流通に関して言えば、木住協でも問題にしているのは、例えば構造材用JAS材についてです。全国に4000ぐらいの製材工場があってJAS認定の工場は500件ぐらい、そのうち構造材を取り扱っているのが90ぐらいしかないのです。国内で流通する構造材がJAS材でないと合理的な構造計算ができません。日本の木材をもっと活用していくためには、JAS材を普及させていかねばなりません。そのためには製材工場のモノのつくり方も変わっていかねばならないと思います。

これまで日本の製材工場は、一本の木からいかに価値の高いものがとれるかということを主眼としていました。例えば大径木からは無垢で使える大きな部材をとっていたのですが、そういう市場が小さくなっています。一方で強度が保証された構造材の需要が高まっています。そういう市場環境下では部材のJAS化を進めることは、欧州などのように、集

成材を中心にした均質な部材の流通を促進する要因になると思うんです。今の仕組みのままで価値歩留まりを追求している事業者には小断面の構造用部材の安定供給を求めても、製材工場にとっては高いハードルです。

他方、中大規模木造が普及し、中・大断面の大きなラミナが必要になってくると、大径木の方が歩留まりが良くなりますから、例えば大径木のラミナから断面の大きな集成材を作って構造用材として使うことが考えられます。

そのためには、異樹種・異等級であっても強度が担保されれば、JAS認定の集成材として使えるようになってくれればと思います。

そういう木材の価値歩留まりを高めるつくり方ができるように、JAS全体のあり方を議論してもいい時期ですね。

さらに、川上の林業の方でも、伐った方がいいが再造林が出来ていないという現実もあります。今は森林蓄積が50億m<sup>3</sup>以上あることになっていますが、ご存知の通り50年以上前に植えた木が大半を占めていて、現在主にそれを伐採しています。このまま国産材の活用が進んでも、再造林がなされないと50年後には日本は木がなくなってしまう。資源の保全と国土の保全という両方の観点から取り組むべき課題です。

**淡野** 森林循環がうまくいかないとCO<sub>2</sub>の吸収機能が高まらず、災害問題も深刻化します。しっかりと植林していかないとならないので、林野庁でも再造林を重要な課題として取り組んでいます。

**市川** 災害に加えて、日本の場合は海の問題もあります。日本の海にこんなに魚がいるのは川がミネラルを運んでくれているからです。それが再造林もされずに山林が荒廃してくると、十分なミネラルが海に流れ込まず、漁獲にも影響が出てしまいます。やはり再造林は義務付けなければなりません。天然更新という名のもとに放置しているところがありますが、海外では確実に植林が義務付けられています。

**淡野** 日本でも、近年創設された森林環境税などの仕組みも活用しながら、そのような森林の公益的な機能を維持していくことが必要ですね。

**市川** 一方で、昔は植林といえばスギとヒノキでしたが、これからは地域を分けて広葉樹との混交の山づくりを進めていくようになってきます。明確に資源として五十年・百年・千年と回していく部分と、今の水源涵養も含めて里山のような形で、できるだけ自然のまま残していく山と明確に分けて、それぞれの持続性を担保するということが一番大切です。

戦後はとにかく植えれば助成金が貰えたので、どんどん植林したけれど、出口戦略が十分ではなかったのです。そういう意味で、もう一度森林資源をベースにした建物文化を再構築し、川上から川下に至る部分での課題を克服し、木



材活用の再循環を確立しないといけません。今まさにそのスタートラインに立っていると思います。

## 国交省から会員へのメッセージ

**市川** 先ほどお伺いしたように、規制も変わり、様々な木造の市場が拡大していくとなれば、木住協の会員の皆さん、特にその多くを占めている地方の住宅メーカー、工務店の方々に、今後こういう方向で勉強していったらとか、こういう活動をされたらという示唆があればお願いいたします。

**淡野** 四号特例については今後省エネ基準を戸建て住宅も含めて適合を義務化する際には見直す必要があると思っていたので、階数が2以上または延べ面積200㎡超の建築物については、現在、非木造建築物は構造基準チェック対象になっていますけれども、構造種別によらず省エネ基準も構造基準もみんなチェックをするという仕組みに統一したいと思っています。そこはちょっとご負担をかける面もありますが、もともとちゃんとやっていたいただいているはずだという前提のもとで、施行までの準備期間をちゃんと取った上で準備をお願いしたいと思います。

逆に第三者チェックが入っているから、安心して取得できる面もあります。今後は2階建て木造建築物も、非木造建築物だけしかなかった第三者チェックが入るから、より安心して木造建築物を取得できる環境になりますというアピールを、地方の工務店にもご協力をいただいて行っていきたいと思っています。

あと、心配しているのはやはり大工さんの減少ですね。せっかくストックのリフォーム需要が伸びてきても、今後本当に担い手が足りるのか。1995年で76万人だった大工さんが、2015年で35万人になっていて、このままだと2030年には20万人とかになりかねない。そういう意味で大工さんがちゃんと確保される環境整備、さきほど言及した流通市場、リフォーム市場を成長させていくのはそういう意味もあると思っていますので、ぜひ地域のホームドクターたる大工さん、工務店は、新築の規制に対応しつつストックビジネスの面でも活躍していただける環境を整備していきたいと思っています。地域の工務店は、承継問題も深刻化しています。せっかく地域とのつながりを持っている工務店という仕組みが、M&Aなどの可能性も含めて継承されるようなことを、今、中小企業庁が相談窓口を設置したり、補助金を出したりしていますけれども、もうちょっと業界全体として取り組んでいくにはどうしたらいいのか、我々の深刻な検討課題だと思っています。

**市川** 承継問題は木住協の会員からも少なからず耳に入ります。会員を退会するケースの理由の中に、承継する人

がいないという方が結構増えています。コロナ禍の中で、廃業とかもあるんですけども、M&Aで2つの会員が1つ減ったという理由も出てきます。

**淡野** 生き残りのための合併は悪くないと思うんですよね。働いている大工さんの、その地域のお客さんとのつながりは消えるわけじゃないので。

**市川** 地域の工務店の皆様には、3階建てや、非住宅、中大規模木造、リフォーム事業への進出などで、安定した受注を維持しながら、今後も、地域のホームドクターとしての役割をお願いしたいと思いますね。

**淡野** 私も在来木造で作った実家のリフォームをしたんですが、段差とか浴室とトイレの動線問題とかを解消して、車椅子で全部移動できるように1階を全面バリアフリーにしました。その時、地域の工務店の方に本当に上手にやってただいて、今後は何かあったらその人にお願いするという関係を作ったんですけど、地域ごとに頼もしいホームドクターがいるように、ぜひ工務店には活躍していただきたいと思います。

**市川** その流れを実現する仕組みを、我々はどう考えていくかですね。協会としては「安心R住宅」も含めて、地域での会員の認知度を高めるということが、それぞれの地域で安心できるホームドクターがいることになると考えております。建物の履歴がしっかり残っていれば、自分が建てた建物でなくても、大工さんは対応できると思うんですよね。

今のリフォームの問題は、開けてみてびっくりということが多くて、最初の見積もりが明確に打ち出せないということでトラブルになるケースも多いので、「履歴を明確にしていく」というのはこれからのストックには最重要課題でしょうね。そうすれば大工さんの活躍の場がもっと増えていきますよね。良質なストックの仕組みや流通での認知度向上のために色々な政策をすすめていただいて、この先10年、15年で本当のリフォームの価値がどんどん上がってくると思います。

**淡野** ちなみに今回の税制でリフォーム促進税制も延長して、省エネ改修については、今まで全部の居室の全部の窓改修という要件がありましたが、それは取り外しました。部分改修でもOKになっています。

**市川** いきなり300万、400万のリフォームになると負担が大きいか、自分の居室の部分だけが50万でできるのなら、という方はたくさんおられると思いますので、お客様には非常にありがたい制度ですね。

**淡野** 今まではローン型と投資型があったんですけど、今回は全部統一をして、ローンが無くてかなりの工事で活用できる仕組みに変えます。ぜひご活用ください。

**市川** それは今回の木芽の記事にぴったりのお話ですね！そういう部分リフォーム、部分ZEHみたいなことは町の工務店が一番得意とされるところでしょうから。



**淡野** 今回の補正予算でも「こどもみらい住宅支援事業」による新築支援は子育て世帯又は若者夫婦世帯に限定ですけれども、リフォームはその限定がありませんので、ぜひ有効活用していただければと思います。

**市川** リフォームはむしろ高齢者世帯にこそ需要があると思います。

**淡野** そういう趣旨もあって高齢者世帯も対象になります。ぜひご活用いただきたいです。

## 新たな年への展望

**淡野** 国としては、脱炭素に向けて省エネ対策と木材利用が2つの柱だと思って木材利用の推進に力を入れていきたいと思っています。

それは規制の合理化もそうですし、補助制度も非常に先導的なプロジェクトでなくとも、合理化された規制を上手に活用した中高層木造、この掛かり増し費用を支援する新しい事業も創設しますので、規制の合理化と支援両面で木造化をぜひ推進していきたいと思っています。

我々も必要な情報提供をいたしますので、協会としてそういう関連の仕組みに関して情報発信していただいて、会員の方々に有効活用していただくようご協力を宜しくお願い致します。

します。

**市川** ここ数年来、毎年毎年新しい施策により、木造の建物をサポートしていただけるので、本当にありがたく思います。あとは我々が、それをどういう風に使っていくかということで。それには、人と地球にやさしい木の良さを、あらためてお客様にしっかりと伝えられる仕組みが必要です。建設に関わる部分の脱炭素をどういうふうにきっちと皆さんにお示しできるかと、明確なメンテナンスのプログラムを作ってこの先のストックに貢献するとか。そうやってさらに多く、長く使えば使うほど木造の脱炭素の貢献度はもっと大きくなりますので。そういう意味でも我々も責任を持って協会として木造建築物の普及を進めていきたいと思っています。

10年や20年で建替えたのでは、脱炭素の貢献にならないですから、山の50~60年以上の循環に見合う住宅建築の周期を見据えていかないとけません。

**淡野** 昨年10月に開催されたWOODRISE 2021 KYOTOも、今年5月には海外からの関係者を招いて、東京にてWOODRISE 2021 BUSINESS SESSIONが開催される予定です。持続可能な中高層木造建築物の発展を目標とする国際イベントの機会などを大いに活用して、木造化推進の波を大きなものにしていきたいと思っています。

**市川** ぜひ、今後ともサポートをよろしくお願いいたします。







第24回

木の<sup>き</sup>あるくらし

作文<sup>さくぶん</sup>コンクール

表彰式をオンラインで開催



令和3年10月30日(土)に小学校の児童を対象に実施した「木の<sup>き</sup>あるくらし」作文コンクールの表彰式を開催しました。今回で24回目を数える作文コンクールですが、コロナ禍が続く状況により、オンライン形式での開催となりました。

今年も多くの学校で臨時休校や分散登校、オンライン授業など、コロナ禍以前とは異なる状況にもかかわらず、国内956校に加え、特別支援学校7校、海外からは5カ国6校、合計6,085点の応募が寄せられました。

この中から厳正な審査を経て国土交通大臣賞、文部科学大臣賞、農林水産大臣賞、環境大臣賞、外務大臣賞の大臣表彰をはじめ、住宅金融支援機構理事長賞、日本木造住宅産業協会会長賞、朝日小学生新聞賞、審査員特別賞など入賞19作品、木住協ブロック賞18作品、佳作29作品、特別賞17作品が決定しました。また、最優秀団体賞1校と優秀団体賞4校も選出しました。

オンライン開催となった表彰式では、来賓として国土交通省住宅局住宅生産課 宿本尚吾課長、審査員長はせがわゆうじ先生、木住協として市川晃会長、越海興一専務理事がライブ会場に出席し、受賞者の皆さんはリモート参加していただきました。





## 6月より小学生対象の 「木のある暮らし」作文募集を開始

「木のある暮らし」作文コンクールは、木造住宅や木材の計画的な利用が地球環境に与える好影響を訴えるとともに、日本の住文化の原点ともいえる木造住宅の素晴らしさを知っていただくため、平成10年から国土交通省が主唱する10月の住生活月間の関連行事の一環として木住協が主催しています（共催＝住宅金融支援機構、後援＝国土交通省、農林水産省、文部科学省、環境省、外務省、朝日小学生新聞社）。

今回の作文コンクールは、令和3年6月1日から木住協のホームページに開催内容を掲載したことを皮切りに、全国の小学校や海外の日本人学校などに告知ポスター、お知らせを送付し、その後、朝日小学生新聞ほか開催告知広告を全国で行い、作品募集を開始しました。さらに、木住協では全国9支部や会員企業の事務所、モデルハウスなどに告知ポスターを貼り出すなど積極的な告知活動を展開し、去る9月6日（消印有効）に応募を締め切らせていただきました。



## 日本国内 956 校、海外 5 カ国 6 校が応募 6 名の審査員が厳正な審査を実施

今年も、新型コロナウイルス感染症拡大の収束が見えない中、全国の多くの小学校が臨時休校や分散登校を余儀なくされたほか、オンライン授業等いつもの状況とは異なるにもかかわらず、高学年の部（小学4年生から6年生）で3,738作品、低学年の部（小学1年生から3年生）で2,347作品が寄せられました。応募学校は国内956校のほかに、特別支援学校7校（19作品）、海外からはドイツ・ニュージーランド・ベトナム・中国・イギリスの5カ国6校からも応募（7作品）をいただきました。

審査は低学年と高学年の部に分けた厳正な予備審査を経て、9月27日に審査員による最終審査を行いました。審査員



木住協 市川晃会長

はイラストレーターのはせがわゆうじ氏を審査員長に、南雲国語教室主宰・南雲ゆりか氏、国土交通省住宅局住宅生産課木造住宅振興室長・前田亮氏、住宅金融支援機構マンション・まちづくり支援部技術統括室長・嘉藤鋭氏、朝日小学生新聞社取締

役営業担当兼大阪支社長・今澤勇氏、木住協専務理事・越海興一の6氏で構成。①「木のある暮らし」というテーマに沿っていること、②具体的で分かりやすいこと、③発想が自由で豊かであること、④表現力がユニークであること、⑤本人の考え方が良く伝わること—などを基準に、厳正に選考しました。



## 5つの大臣賞など表彰

国土交通大臣賞は、高学年の部で5年生の矢野有花さん（愛媛県）の「大工さんに教わったこと」が、低学年の部で1

年生の田中波音さん（千葉県）の「ひいおじいちゃんのつくったいえ」が、それぞれ受賞しました。

文部科学大臣賞は、高学年の部で5年生の松本美香さん（千葉県）の「木がつなぐ素敵な未来」が、低学年の部で3年生の高津渚紗さん（鹿児島県）の「二本のうめの木」が受賞

しました。

農林水産大臣賞は、高学年の部で5年生の杉野愛梨さん（千葉県）の「見えない力」が、低学年の部で3年生の福田将大さん（福井県）の「ぼくのさくらんぼの木」が受賞しました。

環境大臣賞は、高学年の部で5年生の谷澤あかりさん（滋賀県）の「保全活動を通して私が学んだこと」が、低学年の部で2年生の園田愛花さん（東京都）の「どんぐりの木」が受賞しました。

外務大臣賞は、高学年の部で6年生の浜野七海さん（ベトナム）の「東京オリンピックと日本の木」が、低学年の部で2年生の石川真衣さん（秋田県）の「お父さんは木工職人」が受賞しました。

住宅金融支援機構理事長賞は、高学年の部で6年生の黒部優菜さん（東京都）の「家族を見守る大きな木」が、低学年の部で3年生の石野心晴さん（兵庫県）の「まきストーブのある暮らし」が受賞しました。

日本木造住宅産業協会会長賞は、高学年の部で5年生の阿部心咲さん（埼玉県）の「ビワの木」が、低学年の部で2年生の園理香子さん（京都府）の「ヒマラヤスギの木」が受賞しました。

朝日小学生新聞賞は、高学年の部で6年生の小田孝太郎さん（福岡県）の「心地よい響きとは」が、低学年の部で1年生の坂本陽菜さん（兵庫県）の「おとうさんのくつ下の木くず」が受賞しました。

審査員特別賞は、高学年の部で6年生の小寺慎之助さん（千葉県）の「大切にしたい ぼくらの校庭」、4年生の佐々木優都さん（北海道）の「帯広の森『はぐくむ』」が、低学年





※画像は矢野様からご提供いただいております  
国土交通大臣賞高学年の部 矢野 有花さん  
「大工さんに教わったこと」朗読動画

の部で1年生の渡邊彰人さん(福島県)の「もののき」が受賞しました。



## オンライン表彰式をライブ配信 受賞者はリモートで参加

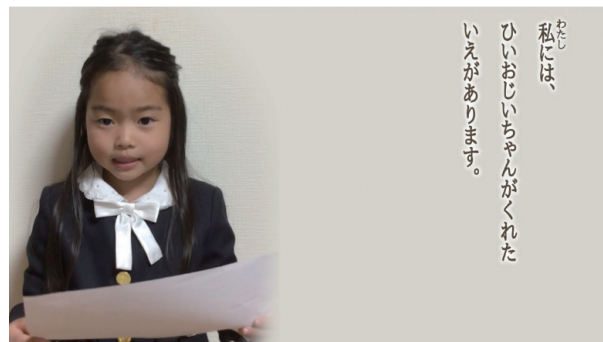
オンライン表彰式には、令和3年10月30日(土)午後2時より、受賞者31名の皆さんにリモート参加していただきました。また、ライブ会場には、来賓、審査員長、協会役員、さらに表彰式をつくり上げてきたスタッフが集まりました。

初めに、司会者より新型コロナウイルス感染症拡大の影響で表彰式の開催が危ぶまれましたが、オンラインで無事実施できたことについて関係者の皆様への感謝の言葉を述べました。

その後、主催者を代表して市川晃会長が、「今年で24回目を迎える作文コンクール表彰式は新型コロナウイルス感染症予防のため、昨年に引き続きオンライン開催となりました。この1年10か月あまり、コロナの影響で皆さんの生活にもいろいろな変化があったと思います。臨時休校や分散登校のほか、オンライン学習を初めて経験した人もいたことでしょう。休みになってもなかなか家族で旅行ができなかったでしょうし、遠くに住んでいるおじいちゃんおばあちゃんに会いに行くのも我慢しなければならない日々が続いたことと思います。そのような状況にありながらも全国各地の小学校や特別支援学校、海外5カ国の日本人学校、そして会員企業等を通じてたくさんの応募を頂きました。私も読ませていただきましたが、どの作品も個性にあふれ、素晴らしく、原稿用紙に向かって鉛筆で一

文字一文字、一生懸命書いている皆さんの姿を思い浮かべながら、本当に心豊かな時間を過ごすことができました。改めて皆さんに心から感謝と敬意を捧げたいと思います。今年も、この作文コンクールを機に皆さんは木の素晴らしさや大切さに気づかれたことと思います。少し難しい言葉ですが、木は再生可能な資源であり、二酸化炭素を吸収し、地球温暖化を防いでくれます。つまり、森の仕組みをしっかりと理解し、木を使っていくことは地球環境の保全につながります。そして何よりも、木は人にやさしい素材なのです。これからもこの作文コンクールのテーマである『木のある暮らし』を通して、木や森そして環境のことに興味を持って考え続けていただきたいと思います。」と開会挨拶を述べました。

続いて来賓を代表して国土交通省住宅局住宅生産課 宿本尚吾課長が、「どの作文も、皆さんが日々の暮らしで木を感じていたり、木を通じていろいろな人とかがわっていることが良く伝わるもので大変感動しました。日本では、昔から木や紙など自然の素材を利用して住宅や住まいをつくってきた歴史があります。その住宅で、四季の移ろいを敏感に感じ取って、茶道や華道、日本画、書道など、さまざまな伝統文化を作ってきました。私は奈良に生まれて、奈良で育ちました。奈良には東大寺というお寺があり、大仏様がいらっしゃいます。でも、奈良で東大寺よりも大仏様よりもっと古くからあるのが法隆寺というお寺です。その法隆寺を建てた聖徳太子がお亡くなりになって、今年で1400年が経ちます。つまり、法隆寺は1400年以上昔からあるお寺ということになります。世界で最も古い、木でできた建物です。日本で最初に世界遺産に登録されました。法隆寺には、建物や仏像などたくさん国宝もあります。これだけ素晴らしい作文を書ける皆さんなら、世界で



※画像は田中様からご提供いただいております  
国土交通大臣賞低学年の部 田中 波音さん  
「ひいおじいちゃんのつくったいえ」朗読動画



一番古い木の建物を見て多くのことを感じ取ってもらえると思います。修学旅行でも家族旅行でも、あるいは大人になってからの友人との旅行、どんな機会でも良いので、ぜひ一度見に来てください。さて、ご父兄の皆さま、また学校の先生方、作文コンクールにご応募いただきましてありがとうございます。小学生の皆さんの木に対する純粋な気持ちが、木の文化や和の住まいの振興といった私たちの仕事を、さらに前向きな気持ちにさせてくれました。本日まで参加の皆様への感謝を申し上げます。」と祝辞を述べました。



## 受賞者の皆さんから事前に送られた喜びの声を動画で配信

この後、受賞者の表彰に移りました。昨年に引き続きオンライン開催となり、受賞者から事前に送られた喜びの声を編集して配信することとなりました。受賞者の皆さんのうれしそうな笑顔や照れた顔、ふとした時の表情など、印象深い動画が多数寄せられました。

国土交通大臣賞の矢野有花さんと田中波音さんには、国土交通省住宅局住宅生産課 宿本尚吾課長より、オンラインにて表彰状が授与され、矢野さんは「とても素晴らしい賞を頂けてうれしいです。これからも大工さんに造ってもらった家と積み木を大切にしていきたいです」、田中さんは「戦争にも水害にも、地震にも負けなかったひいおじいちゃんの家。100年間建っていた神戸の家と、こんなお別れ会ができてうれしいです。私も大きくなったら立派な木の家を建ててみたいです」と受賞の喜びを語ってくれました。

引き続き、各受賞者の皆さんのコメント動画が配信され、農林水産大臣賞を受賞した杉野愛梨さんより「私は自然が大好きです。でも、残念ながら私の住んでいる街はあまり緑がありません。木と森そして水が私たちにとってとても大切な存在であると改めて気づきました。その大きな存在を守りたいという私の想いが込められたこの作品に素晴らしい賞を下さる本当にありがとうございました」、福田将大さんからは「来



国土交通省 宿本課長



はせがわ ゆうじ 審査員長



木住協 越海専務理事

年もさくらんぼの実がなるように、木を大切に育てたいです」とのコメントが寄せられました。



## 審査員特別賞を含む 19名の皆さんの喜びの声

文部科学大臣賞では、松本美春さんより「この作文に書いた木の椅子をこれからも大切に使っていきたいです」、高津渚紗さんからは「賞状をもらって、梅の木について作文を書いて本当に良かったと思いました。ばあばを木の下に連れて行って一緒に梅パーティーをしたいです」とのコメントをいただきました。

環境大臣賞では、谷澤あかりさんより「これからも作文を通して森の魅力を伝えていきたいと思います」、園田愛花さんからは「これからも自然環境のために私でもできる活動をしていきたいと思います」とのコメントをいただきました。

外務大臣賞では、浜野七海さんより「東京オリンピックで使用された木がどのように再利用されたのか、巡って見ることを楽しみにしています」、石川真衣さんからは「これからもお父さんのつくった木工品を大切に使い続けたいと思います」とのコメントをいただきました。

住宅金融支援機構理事長賞では、黒部優菜さんより「これからもおばあちゃんとの思い出の木と、家族との絆を大切にしていきたいです」、石野心晴さんからは「ありがとうございます。とっても嬉しいです。私は自然と薪ストーブが大好きです」とのコメントをいただきました。

日本木造住宅産業協会会長賞では、阿部心咲さんより「これからもおばあちゃんと植えたビワの木を大切に育てながら、



受賞者インタビューの様子







リモート参加した受賞者の皆さん全員集合 スクリーンショット記念撮影

ともに成長していきたいです」、園理香子さんからは「ありがとうございました。これからも頑張ります」とのコメントをいただきました。

朝日小学生新聞賞では、小田孝太郎さんより「受賞の知らせを受けたときは驚きましたが、今は本当にうれしい気持ちでいっぱいです。今回の受賞をきっかけに木のある暮らしに関心を持つようになりました。作文を書くことにも自信がついてきました」、坂本陽菜さんからは「ありがとうございます。初めての表彰状うれしいです」とのコメントをいただきました。

審査員特別賞では、小寺慎之助さんより「楽しかった学校生活の思い出を書いた作文で賞がもらえてうれしいです。自然豊かな未来のために自分に何ができるか考えていきたいと思います」、佐々木優都さんからは「受賞できてとてもうれしいです。来年は森の中でキャンプがしたいです」、渡邊彰人さんからは「ありがとうございます!」とのコメントをいただきました。



## 木住協全国9ブロック賞表彰 最優秀団体賞も決定

続いて、日本木造住宅産業協会ブロック賞の授与に移りました。表彰は、全国9ブロックに分かれて、審査を担当した支部名で行われました。

北海道ブロック賞は、高学年の部で4年の隈本香凛さん(北海道)の「季節を感じる楽しい校庭」が、低学年の部で3年の笹谷菜さん(北海道)の「木と私たちのかかわり」が受賞しました。

東北ブロック賞は、高学年の部で4年の谷中ころさん(福島県)の「わたしの木の家」が、低学年の部で1年の鈴木穂香さん(福島県)の「わたしのいえ」が受賞しました。

関東ブロックは、高学年の部で6年の天田有紀さん(群馬県)の「日本の木造建築」が、低学年の部で2年の木村涼花さん(東京都)の「きもちをつなぐ木」が受賞しました。

北信越ブロック賞は、高学年の部で6年の塚田莉奈さん(長

野県)の「皆で作った木の遊び場 ツリーハウス!」が、低学年の部で2年の清水杏珠さん(福井県)の「わたしとおばあちゃんのかきの木」が受賞しました。

甲・静岡ブロック賞は、高学年の部で6年の原絢奈乃さん(静岡県)の「オリーブの木にこめた平和への願い」が、低学年の部で3年の近藤穂乃花さん(静岡県)の「木の名前しりとり」が受賞しました。

中部ブロック賞は、高学年の部で5年の加藤淳さん(愛知県)の「お父さんと木の家具」が、低学年の部で3年の玉木心結さん(三重県)の「わたしの家」が受賞しました。

近畿ブロック賞は、高学年の部で5年の宮崎純大さん(兵庫県)の「音のゆくえ」が、低学年の部で2年の石井香流さん(和歌山県)の「私と木のかかわり」が受賞しました。

四国ブロック賞は、高学年の部で4年の近松叶さん(愛媛県)の「時代をこえて」が、低学年の部で1年の多田紗耶加さん(徳島県)の「ふしぎなたけ」が受賞しました。

中国・九州・沖縄ブロック賞は、高学年の部で6年の竹田舞子さん(福岡県)の「私の宝物」が、低学年の部で2年の矢野みやびさん(岡山県)の「木のあるしごととおとうさん」が受賞しました。

受賞した皆さんから動画コメントが寄せられ、リモート参加もされました。また、佳作として、高学年の部15作品、低学年の部14作品、計29作品が選出されました。さらに、特別賞として、特別支援学校の高学年の部8作品、低学年の部9作品、計17作品が選出されました。

この後団体賞の表彰に移り、作文コンクールへの取り組みが評価された、矢吹町立矢吹小学校(福島県)が最優秀団体賞に輝きました。また、江別市立対雁小学校(北海道)、檀原市立畝傍南小学校(奈良県)、栄町立竜角寺台小学校(千葉県)、富山市立上条小学校(富山県)の4校が優秀団体賞を受賞しました。

各賞の授与が終了した後、行われた作品朗読はオンライン開催ということで、国土交通大臣賞の矢野有花さん、田中波音さんの二人の作品が代表して配信されました。朗読を聞くだけでも二人の気持ちが伝わる素晴らしい作品でしたが、さらにお送りいただいたイメージ写真を背景に編集しての朗読動画はさらなる感動を呼びました。希望された受賞者に後日お送りしたDVDでは5大臣賞の高学年と低学年計10名による朗読の様子も収録しました。



## 受賞者参加型の質問コーナーを実施 2回目のオンライン開催で初の試み

今年で2回目となるオンライン表彰式。実際に式典会場で



の雰囲気味わうことができない中、リモート参加でも受賞者の皆様に楽しんでいただきたいという思いから、インタビューコーナーを設けて受賞者にお話を伺いました。

司会者からの呼びかけに、受賞者の皆さんは元気よく手を挙げて答えてくださいました。「作文の題名をどうやって決めましたか?」という質問に、加藤淳さんは「お父さんのことを作文に書いたので、お父さんに色んなことを聞いて題名を決めました」、坂本陽菜さんは「いつも木くずがついているお父さんの靴下を題名にして作文を書きました」と微笑ましいエピソードとともに答えてくださいました。また、「今回受賞して周りで一番喜んでくれた人は誰ですか?」という質問に、多田紗耶加さんは「竹をつかっているおばあちゃんのことを書いたので、おばあちゃんが一番喜んでくれました」。「おばあちゃんは、竹をつかって美味しいぬか漬けを作ってくれます」、佐々木優都さんは「校長先生に『おめでとう』と言ってもらえました」と、学校の先生や家族との日常を語ってくださいました。来賓の宿本尚吾氏から「作文を書くのにどれくらいの日にちをかけたか?」という質問も。黒部優菜さんは「一日かけて書いて、翌日また読み直して完成させました」、宮崎純大さんは「一年かけて書き上げました」と答えました。宿本氏からは「驚きました! 一年も頑張ってますすごいですね。また来年も大作を期待しています。」と声をかけられました。

最近の時勢において、記念すべき式典を会場で催すことがかなわないことは残念ですが、画面越しに映るリラックスした自然な笑顔や心温まるエピソードが語られ、あたたかな雰囲気が伝わる印象的な式典となりました。



## はせがわ審査員長による講評 個性輝く作品を書いた児童へ 伝えたいこと

表彰式ではこの後に審査講評が行われ、審査員長のはせがわ氏が「受賞者の皆さんおめでとうございます。作文を書いたご本人の朗読はとても良いですね。さらにイメージ映像もあり、文字で読んでいたときよりも心を打たれました。たくさんの応募の中から選ばれた皆さんの作品は、どれもきらりと光るものがあつたと思います。これからも作品づくりを続けていくときに大事なことを3つ、私からお伝えさせてください。一つ、『好奇心を失わないこと』。ワクワクする気持ちを大切に、色々なことに向き合って、いつも追いかけていくことを忘れないでください。大人になっても好奇心を絶やすことなく、持ち続けてください。二つ目、『型にはまらないこと』。お手本があると、つい、それに近づこうと思ってしまいます。しかし、それに頼ってしまうと、優秀ではあるけれど変わり映えのないものになってしまう。型を自分で壊すということも創作をする上では

大切です。最後に一番大切なこと。作品には、必ずその“人となり”が表れます。魅力のある人がつくったものには、必ずその人の魅力が吹き込まれると思います。今回の作文コンクールでも、皆さんの素敵な“人となり”が表れたのだと思います。そのまま素敵な人でいてください。また来年も、新しい作品に出会えることを楽しみにしています。」と述べました。

この後、主催者を代表して越海専務理事が閉会の挨拶に立ち、「受賞者の皆さん、お父様お母様、おめでとうございました。また、学校教育の場に本コンクールを取り入れていただきました学校の先生をはじめとする教育現場の皆様方に感謝申し上げます。ありがとうございました。さて今年から、毎年10月が木材利用促進月間になっています。全国規模で木づかい運動、あるいはwood changeなどの様々な活動が展開されております。木造建築や街づくりに取り組む木住協会員642社すべてが、木材利用促進の一翼を担っています。そして合わせて木を題材にした環境教育として、『木のある暮らし』作文コンクールも、万全の態勢でバックアップしております。来年も作品のご応募をお待ちしておりますので、よろしく願いいたします。」と感謝の言葉で締めくくりました。

今回もオンライン表彰式のため、スクリーンショットでの記念撮影となりました。リモート参加していた皆さんはパソコンやスマートフォンのカメラに顔を近づけて、笑顔で揃って撮影しました。

なお、作文コンクールに応募していただいた皆さんには「かわくと木になるエコねんど」を贈呈するほか、木住協のホームページに受賞者名を掲載するとともに、今回のオンライン表彰式、大臣賞受賞者10名の朗読動画をご覧いただけます。木住協では今後も「木のある暮らし」をテーマに、地球環境にやさしくサステナブルな素材である「木」の良さを訴え、日本の住文化の原点といえる木造住宅の素晴らしさを知っていただくことなどを目的に、この作文コンクールを継続していきたいと考えています。

オンライン表彰式  
大臣賞受賞者朗読動画  
はこちら







## 受賞者と作品名

### 大臣賞等・ブロック賞

	賞 名	題 名	名 前	都道府県
低学年の部 (小学1年生から3年生)	国土交通大臣賞	「ひいおじいちゃんのつくったいえ」	田中 波音 さん	千葉県
	文部科学大臣賞	二本のうめの木	高津 渚紗 さん	鹿児島県
	農林水産大臣賞	「ぼくのさくらんぼの木」	福田 将大 さん	福井県
	環境大臣賞	どんぐりの木	園田 愛花 さん	東京都
	外務大臣賞	お父さんは木工職人	石川 真衣 さん	秋田県
	住宅金融支援機構 理事長賞	まきストーブのあるぐらし	石野 心晴 さん	兵庫県
	日本木造住宅産業協会 会長賞	ヒマラヤスギの木	園 理香子 さん	京都府
	朝日小学生新聞賞	おとうさんのくつ下の木くず	坂本 陽菜 さん	兵庫県
	審査員特別賞	「もものき」	渡邊 彰人 さん	福島県
	北海道ブロック エゾマツ賞	木と私たちとのかかわり	笹谷 菜 さん	北海道
	東北ブロック ケヤキ賞	わたしのいえ	鈴木 穂香 さん	福島県
	関東ブロック イチョウ賞	さもちをつなぐ木	木村 涼花 さん	東京都
	北信越ブロック マツ賞	わたしとおばあちゃんのかきの木	清水 杏珠 さん	福井県
	甲・静岡ブロック モクセイ賞	木の名前しりとり	近藤 穂乃花 さん	静岡県
	中部ブロック 神宮スギ賞	わたしの家	玉木 心結 さん	三重県
	近畿ブロック ウバメガシ賞	私と木のかかわり	石井 香流 さん	和歌山県
	四国ブロック やまもも賞	ふしぎなたけ	多田 紗耶加 さん	徳島県
	中国・九州・沖縄ブロック アカマツ賞	木のあるしごととおとうさん	矢野 みやび さん	岡山県

	賞 名	題 名	名 前	都道府県
高学年の部 (小学4年生から6年生)	国土交通大臣賞	大工さんに教わったこと	矢野 有花 さん	愛媛県
	文部科学大臣賞	木がつなぐ素敵な未来	松本 美春 さん	千葉県
	農林水産大臣賞	見えない力	杉野 愛梨 さん	千葉県
	環境大臣賞	「保全活動を通して私が学んだこと」	谷澤 あかり さん	滋賀県
	外務大臣賞	東京オリンピックと日本の木	浜野 七海 さん	ベトナム
	住宅金融支援機構 理事長賞	家族を見守る大きな木	黒部 優菜 さん	東京都
	日本木造住宅産業協会 会長賞	ビワの木	阿部 心咲 さん	埼玉県
	朝日小学生新聞賞	心地よい響きとは	小田 孝太朗 さん	福岡県
	審査員特別賞	大切にしたい ぼくらの校庭	小寺 慎之助 さん	千葉県
	審査員特別賞	帯広の森 「はぐくむ」	佐々木 優都 さん	北海道
	北海道ブロック エゾマツ賞	季節を感じる楽しい校庭	隈本 香凛 さん	北海道
	東北ブロック ケヤキ賞	わたしの木の家	谷中 こころ さん	福島県
	関東ブロック クロマツ賞	日本の木造建築	天田 有紀 さん	群馬県
	北信越ブロック シラカバ賞	皆で作った木の遊び場 ツリーハウス!	塚田 莉奈 さん	長野県
	甲・静岡ブロック モクセイ賞	オリーブの木にこめた平和への願い	原 絆奈乃 さん	静岡県
	中部ブロック ハナノキ賞	お父さんと木の家具	加藤 淳 さん	愛知県
	近畿ブロック クスノキ賞	音のゆくえ	宮崎 純大 さん	兵庫県
	四国ブロック マツ賞	時代をこえて	近松 叶 さん	愛媛県
	中国・九州・沖縄ブロック つつじ賞	私の宝物	竹田 舞子 さん	福岡県

### 佳作

低学年の部	高学年の部
奥山 賢人 さん 鹿児島県	河野 晴哉 さん 愛媛県
佐邊 想祐 さん 長野県	佐藤 愛美 さん 和歌山県
井上 湊大 さん ドイツ連邦共和国	中野 未来 さん 福島県
岸 眞悠子 さん 福島県	諸田 旺雅 さん 群馬県
倉林 祐助 さん 埼玉県	山崎 杏 さん 広島県
木場崎 叶灯 さん 鹿児島県	江頭 和佳 さん 佐賀県
藤田 心葉 さん 京都府	大野 泰輝 さん ニュージーランド
渡邊 莉咲 さん 茨城県	長沼 優杜 さん 福島県
菊田 銀之介 さん 熊本県	淵上 克 さん 福井県
小見山 岳琉 さん 岡山県	星野 真子 さん 群馬県
高木 駿 さん 茨城県	金澤 心和 さん 千葉県
長峯 和賀子 さん 福島県	柴田 凜 さん 山形県
比良 優月 さん 鹿児島県	菅谷 歩叶 さん 千葉県
山下 梨夏 さん 鹿児島県	瀧田 和奏 さん 福島県
	武富 悠真 さん 佐賀県

### 特別賞

低学年の部	高学年の部
鎌田 夏帆さん 秋田県	照内 悠太さん 東京都
島田 晴生さん 福井県	新倉 将希さん 神奈川県
	新村 響希さん 東京都
	栢田 夏帆さん 東京都

茨木市立玉島小学校 11 名のみなさん (大阪府)

### 団体の部

最優秀団体賞	矢吹町立矢吹小学校 富山市立上条小学校
優秀団体賞	榎原市立畝傍南小学校 江別市立対雁小学校 栄町立竜角寺台小学校



## 審査員の講評



イラストレーター

はせがわゆうじ氏

今年も優秀な作品がたくさん集まりました。

木や木の家、木の家具や道具など、木というあたたかみのあるモチーフに様々な人間模様を感じさせていただきました。

おじいちゃんの分身のような本棚に大好きな本を入れて、おじいちゃんに読んでもらってみたいと思う「ヒマラヤスギの木」。おじいちゃん読んでくれているかなあ。

「金」ではなく「木」のメダルをがんばったおとうさんにあげたい「おとうさんのくつ下の木くず」。このおとうさんにはきっと木のメダルが一番ですね。

この木の下にいるとみんなが自然と笑顔になり怒る人はいないという「二本のうめの木」。読んでるこちらにもなんだか幸せな気持ちになりました。

どんぐり銀行ってほんとにあるんですね。とっても素敵なプロジェクトを教えてくれた「どんぐりの木」。

ほのぼのとした文体でおなかもえがおにしてくれる「もののき」。

おかあさんがなぜ木のまな板を大切にすることがよくわかる「心地よい響きとは」。道具を大切に使い続けるおかあさんの気持ちがよく伝わります。

辛いことを一緒に乗り越えて来たからこそ特別な想いがある木の椅子の「木がつなぐ素敵な未来」。ぜひ未来のお子さんにも座らせてあげてください。

空に向かって伸びている木々と同じくらいの根が、大地を抱きしめている…この表現に心が揺さぶられた「見えない力」。この作者さんは将来、大作家さんになるかもしれないと予感させられました。

校庭の中の日々がとっても充実して楽しそうな「大切にしたい ぼくらの校庭」。自然とバランスよく共生出来るってすばらしいです。

「東京オリンピックと日本の木」は競技場などに使われている木の性質や特徴をよく調べて研究されています。海外から見た日本の良さのひとつは木造なのでしょうね。

ここには書ききれませんが、他の作品もみんなそれぞれ優秀で素敵でした。今はこんな世の中ですが、子供たちの作文を読んでいるとなんだか励まされます。社会にまみれて忘れかけている何かを思い出させてくれるからかな…と思います。



南雲国語教室主宰

南雲 ゆりか氏

審査会では、内容、表現に新鮮味や独自性のある作品が高評価を得ました。

「ヒマラヤスギの木」は、気持ちの表現に個性がありました。おじいちゃんの生まれたときに植えたヒマラヤスギが倒れてしまった悲しみを「家にもわも泣いているみたい」と書きます。でも、それが本棚に生まれかわると「おじいちゃんがかえってきたみたい」で、「おじいちゃんがわたしの好きな本を読んでいるみたいでうれしい」と表現しています。こんなふうに、天国のおじいちゃんを近くに感じられるのはすてきですね。

次に、校庭のピワを食べる楽しい場面から始まる、「大切にしたい ぼくらの校庭」。「～つまみ食い。」「～大好評。」などの名詞止めが歯切れよく、いかにもやんちゃな雰囲気です。校庭を里山になぞらえているのも、おもしろい見方だと思いました。

「木がつなぐ素敵な未来」は、静かな文章の中に温かい母娘愛があふれていました。「高学年なのに頭をなでられるのははずかしい」といいながらも、命がけで産んでくれたお母さんの気持ちを受け止めます。「私も母のようにぬくもりがある木のいすに子供の成長を重ね、いすをなでる日が来るだろう」という結びに、ほろりとさせられました。

それから、「どんぐりの木」。未来の森のために「わたしでもできる活どうをやっていききたい」という言葉は、ジャン・ジオノの『木を植えた男』（どんぐりを植えて森をつくる物語）を思わせます。子どもたちが一心に拾い集めたどんぐりが、全国で森へと育っていく……胸が熱くなりました。

木の家や木製品への愛着、お父さんの仕事への誇り、木や自然への愛情など、それぞれの思いのこもった読み応えのある作品が、他にもたくさんありました。ひとりひとりに感想とお礼をお伝えできないのが残念です。みなさんの作文を読みながら幸せな時間を過ごしました。ありがとうございました。



国土交通省 住宅局

住宅生産課 木造住宅振興室長

前田 亮氏

入選した小学生のみなさん、大変おめでとうございます。生き生きとした手書きの文字や、消しゴムで消して黒くなった跡を見て、原稿用紙にむかって鉛筆で一文字一文字、一生懸命書いているみなさんの姿を思い浮かべながら、楽しく読ませていただきました。

低学年の部の国土交通大臣賞受賞作は、「ひいおじいちゃんのつくったいえ」です。大工のひいおじいちゃんがつくった家、思い出いっぱいの家、阪神・淡路大震災でも生き残った家、そんな大好きな家が周りの開発に伴って取り壊されてしまう。自分が遊んでいた思い出の木の品も持っていかれて悔しいけど、新しい持ち主のもとで使ってもらえる、自分も大事につないでいくと考え直す。一人の小学生が、大好きな家の取り壊しという事態に直面して、心が揺れ動きながらも、前向きになって成長していく、感動さえ覚える作品です。

高学年の部の国土交通大臣賞受賞作は、「大工さんに教わったこと」です。建設途中の家の木の香り、木のけずりかすのさわり心地、それとともに、大工さんがやさしく接してくれたこと、完成したら見えなくなる柱に名前を書かせてもらったこと、大工さんが自分たちのために一生懸命作業してくれたことなど、5年前の記憶が、鮮明に、みずみずしく表現されています。木の家が大工さんの熱意や思いやりで作られていることを感じた作者が、自分の家を好きになり、また、自分も周りの人を幸せにしたいと思う。街で見かける一軒一軒の家にこのような作り手や住む人の思いが詰まっているのかな、と幸せな気持ちにさせてもらえる作品です。

このほかの作品についても、木や自然、木で作られた身近なものなどについて、小さな気づきを丁寧に掘り下げ、自分なりに考えて表現されており、いずれも個性豊かで素晴らしい作品ぞろいでした。来年も小学生のみなさんの素晴らしい作品と出会えることを期待しております。





### 独立行政法人 住宅金融支援機構 マンション・まちづくり支援部 技術統括室長 嘉藤 鋭氏

まわりにある木のことを作文した作品を、全国から数多く応募していただきました。誠にありがとうございました。皆さまの作品を読んでいくと、皆さまの想いにどんどん引き込まれ、その情景が鮮明に頭に浮かび、とても暖かい気持ちになりました。いずれの作品も力作で素晴らしい作品ばかりでした。

低学年の部の住宅金融支援機構理事長賞「まきストーブのあるくらし」は、お父さんがまきを一所懸命に準備する姿と、その作業を手伝う情景を見事に描いています。アリとキリギリスの話を引用して何でこんな面倒なことをしているのか、また、まきストーブで木をどんどん燃やすことに疑問を持ったことを上手に表現しています。お母さんの気持ちやお父さんの説明を聞いて疑問の答えをしっかり受け止め、山を大切にすることにも理解を深めています。このように、木とともに暮らしていきたいと願い、木のある幸せな暮らしを描いた素晴らしい作品です。

高学年の部の住宅金融支援機構理事長賞「家族を見守る大きな木」は、祖父の家に行った時、祖父の家の庭の大きな木、ハナミズキの存在を見事に描写し、祖父が木を大切にすることが伝わってきます。小さいときに泣いたりすると抱っこしてその木と一緒に見ていた母の思い出や母が大事にしている写真に祖母と庭の木が写り、祖母の膝の上に抱っこされ、その周りに祖父、両親、叔母、叔父の優しい笑顔が溢れているエピソードは、木と家族の関係が深いことを丁寧に表現しています。このように、祖父の庭の大きなハナミズキを通じて、家族が繋がっていることを描いた素晴らしい作品です。

作文は、作文用紙を通じて作者の思いが読者に伝わります。用紙に書かれた文字一つ一つが作者の思いを届け、感動を与えてくれます。素晴らしい作文を、これからも書き続けてください。素敵な感動をみんなに届けることを期待しています。



### 朝日学生新聞社 取締役営業担当 兼 大阪支社長 今澤 勇氏

新聞記者もおかまけの取材力・観察力・表現力。聞いたこと、調べたこと、感じたこと、さまざまな体験を通じてみなさん多くのことを学びながら、それらを作品の中にとってもいきいきと表現していました。どの作品も木のある暮らしの中の日常を、みずからの視点で丁寧に切り取った力作ばかりでした。

低学年の部の朝日小学生新聞賞「おとうさんのくつ下の木くず」は、木でドアを作るお父さんの仕事にまつわる家族のさりげないやりとりが描かれています。木のかおりやざらざら・ちくちくする木くずの風合いが、読んでいて直接伝わってくるようでした。お父さんの仕事を誇りに思い、感謝する気持ち。「私が大きくなったらおとうさんに木でできたメダルをあげたいです」。東京オリンピックの金メダルに負けないくらい、とても素敵な心のこもった最高の「木のメダル」ですね。

高学年の部の朝日小学生新聞賞「心地よい響きとは」は、「まな板」をめぐるお母さんとのエピソードです。母の日に白い樹脂製のまな板をお母さんにプレゼントします。でもなぜか使ってくれません。お母さんが長く愛用しているヒバのまな板にこだわる理由とは？ 親子の

思いやりや戸惑いの複雑な心情が見事に表現されています。ストーリーの展開もスムーズで、「トントン」と心地よいまな板の響きを感じながら楽しく読みました。

今回の小学生新聞賞の2作品はともに木と家族の物語でした。家族の想いが「木くず」や「ヒバのまな板」を介してつながっていききました。

どのような時代でも、木のぬくもりは人の心をいやしてくれます。受賞作に限らず、どの作品も思いやりや愛情あふれるものばかりで、審査をしながらも、とても心温まる思いがしました。

受賞されたみなさん、おめでとうございます。応募されたすべてのみなさんに感謝申し上げます。



### 一般社団法人日本木造住宅産業協会 専務理事 越海 興一氏

今年も素晴らしい作文がいっぱい届きました。応募いただいた小学生の皆さん、夏休み中よく頑張りました！そして受賞者の皆さん、本当におめでとうございます。多くの先生方の御理解御賛同を得て、学校教育の場に本コンクールを採り入れていただき感謝申し上げます。

じっくり読ませていただくと、想ったより活発で行動的な内容の作品が多く、コロナ禍でも屋外で自然とふれあう機会の創出に努力されている保護者の皆様方に敬意を表します。健やかな成長とともに社会変化にもバランス良く適応し、情報技術の進展で広がるネット環境と、人や自然を実感するリアル環境と、それぞれの特長を上手に利用して時代の先端を走る子供たちの将来に大いに期待しております。

さて、カーボンニュートラル政策において、住宅や建築物をはじめ木材の幅広い活用に対し二酸化炭素の貯蔵効果が注目を集めていますが、山の樹木を切り出した後に植林しなければ、森林資源の循環利用とは言えません。応募いただいた皆さんは、種蒔きや植林、間伐、伐採から製材まで、そして木の家や家具、木製品に様々な「木のある暮らし」を見出し、それぞれ子供らしい素直な感性で生き生きと文章表現してくれました。この次は、是非ほかのお友達の作品も読んで、「木のある暮らし」で循環利用の「輪」をつなげてみてください。自分を含めた大きな「輪」は、日本文化を象徴する「和」にも通じる考え方です。

今年から新しく、毎年10月は「木材利用促進月間」となり、全国規模で「木づかい運動」「ウッド・チェンジ」など従来に増して活発な運動が展開されます。その一翼を担って、木住協の会員は、樹木の成長から伐採まで50年以上かかる循環に見合う長持ちする木造住宅の建設に取り組んでおります。引き続き、木を題材とする環境教育として本コンクールを協会あげて応援してまいります。

最後に、本コンクールにご後援をいただきました国土交通省、文部科学省、農林水産省、環境省、外務省、住宅金融支援機構、朝日学生新聞社、ならびに教育委員会ははじめ学校関係の皆様、ご協力いただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。また来年の応募をお待ちしております。



# 『こうすればできる 「純木造 3 階建て事務所建築」 中大規模木造の検討』の発刊

一般社団法人日本木造住宅産業協会は、木造軸組工法による非住宅系中大規模木造建築物の推進を図る一助として、建物用途ごとに設計資料をまとめています。今回は、具体的なモデル建物として「3階建て・延べ面積約1,000㎡・準耐火構造の事務所ビル」を設定し、意匠・構造・設備の計画、設計時の留意事項、施工時の協業体制や対応の考え方等について、より具体的に整理し、鉄骨造モデルとの建設コストを比較した資料を含めて、『こうすればできる「純木造3階建て事務所建築」中大規模木造の検討』と題した書籍を発刊しました。これから中大規模木造や非住宅建築への取組みを始めようとしている方々にとっての参考書としても活用いただけます。

なお、この書籍をテキストにした講習会を2月1日東京会場・WEB同時開催、2月4日大阪会場で開催します。申込期限が迫っていますが、当協会ホームページをご確認いただき、是非ご参加いただきますようご案内します。

## 書籍の概要

### ◇コンテンツ

- 中大規模木造のねらいとモデル建物
- 3階建て1,000㎡木造準耐火建築物  
テナントビル計画のポイント
- 構造フレームを考える
- 準耐火構造等の性能をふまえた各部仕様
- 設備計画への配慮
- 木造らしく、長持ちのためのしつらえ
- 木構造工事と木造ファブリケーター
- モデル建物の設計図と建設コスト比較

◇発行日 令和3年12月

◇サイズページ数 A4／139P

◇価 格 会員3,300円税込  
非会員6,600円税込





## 中高層木造建築物の発展のための国際フォーラムに 木住協も出展参加

# WOODRISE 2021 KYOTO

国際建築住宅産業協会主催、現地とオンライン配信でハイブリッド開催

国際建築住宅産業協会が主催する「WOODRISE 2021 KYOTO」が、2021年10月15～17日に国立京都国際会館において開催された。このWOODRISEイベントは第3回目で初の日本開催となり、大々的なイベント内容が予定されていたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、当初の計画より一部開催内容を変更。京都会場での現地参加、オンライン参加のいずれかで参加可能なハイブリッド開催という形で実施された。近年世界中で注目を集める中高層木造建築物のさらなる発展を目指し、世界中から最先端の知見が集結し行われた本イベントの様子を現地からレポートする。



①メインホールで行われたオープニングセレモニーでの矢野会長のスピーチ ②③会場となった国立京都国際会館

### 木造建築技術の先進各国の情報・技術が 集結する貴重な機会

WOODRISEとは、中高層木造建築物の発展を目指す国際的イベントで、第1回は2017年にフランス・ポルドーで、第2回は2019年にカナダ・ケベックで開催され、今回の京都大会は第3回目の開催となる。会場は日本初の国立会議施設であり、1997年に京都議定書が採択された場所としても知られる国立京都国際会館。開催期間中、豊かな緑に囲まれ景観の美しいこの場所に、木造建築技術の最先端の知見が集結し、情報発信するとともに、現地・オンラインで参加した総勢800人余りの関係者・参加者が交流を深めた。

16日に行われたオープニングセレモニーは、一般社団法人国際建築住宅産業協会・矢野龍会長のウェルカムスピーチからスタートし、「木造建築について、長い歴史を有

する日本においても、中高層建築物・大規模建築物への木材の利活用が大きな政策課題となっていることを踏まえ、「持続可能な開発に向けた木の建築～伝統から未来へ～」のテーマのもと、木造建築技術の先進各国の取組について、広く情報と知見を集めるとともに、国内および諸外国の関係団体・企業の交流を深めることを目的に日本で開催いたします。」と開催趣旨が述べられた。

また、新型コロナウイルス感染症の影響で、社交行事やテクニカルツアーが延期となり、自然が美しい京都で、多くの参加者をお迎えできなかった点は残念であるとしながらも、オンラインを含め参加者数は約800名にものほり、本イベントへの関心の高さがうかがえ、持続可能な社会の構築に向けて、世界各国で対策が進められる中、日本においても木は再生可能でカーボンニュートラルや脱炭素社会の実現、SDGs推進への期待が高まっています。本イベントは、それぞれの分野において世界の第一線で活躍



されている方々が中高層木造建築に関する素晴らしい取組や知見に触れることができる大変貴重な機会となっております。コロナ禍での開催になりますが、今こそ中高層木造建築の発展・促進に向けて歩み続けることで社会や環境に貢献できるものと思っております。」と、あらためて本イベントの意義深さを語り、開催の成果に期待を寄せた。

## 導入講演

### 日本の歴史的建築物の木材利用と技術

初日、メインステージではウェルカムスピーチに続き、各国の海外来賓あいさつがオンラインで行われ、その後の導入講演で、工学院大学の後藤治教授が登壇した。教授は、法隆寺や南大門といった国内に現存する歴史的建築物の様式や技術が時代と共に変化し、その変化が木材の供給状況や製材加工・工具等の変化に関係していると説明。その一例として13世紀の貫工法の導入や、15世紀の継手仕口の発達等を挙げた。一方、森林資源の利用という観点から見ると、伝統的な建築物における木材利用は必ずしも理想的な形ではなかったと指摘。現存する歴史的建造物で各部材の育林期間と耐久



④導入講演のスピーカーとして登壇した工学院大学の後藤教授

年数の比較調査を行った調査によると、柱や梁等の主要部材では育林期間より長持ちしているが、壁や床等では育林期間よりも短い期間で更新されていたという。こうした結果を踏まえ、建築物の生産が森林資源の浪費につながることは避けるべきであり、歴史的建築物におけるこうした木材利用状況は、今後の建築生産における森林資源のトレーサビリティを考えるうえで参考にすべきものであると語った。

### 中大規模建築における木材利用の可能性拡大の一助になることを期待

16日には報道関係者に向けた記者会見が開かれ、改めて本イベントの趣旨や開催状況についての説明、質疑応答が行われた。矢野龍会長は、開催内容の変更について、コロナ禍の現下、海外からの来日がかかわらず、ガラディナーやテクニカルツアーは延期せざるを得ない状況となったが、対面でのディスカッションや、施工実例・研究事例等の視察を通じたコミュニケーションもWOODRISEの重要な



⑤記者会見でイベント主旨や中大規模建築物への木材利用の現状や今後の展望が語られた（左から橋本委員長、矢野会長、深尾会長）

意義だと考えているとし、そのような交流の機会を提供するため、2022年5月末「WOODRISE 2021 BUSINESS SESSION」を東京で開催することを宣言した。

また、2021年10月1日に施行された改正公共建築物木材利用促進法について触れ、あわせて10月が木材利用促進月間に定められ、本イベントも政府認定の関連イベントに位置付けられているとし、「本大会が中高層建築や大規模建築において木材利用の可能性拡大の一助になれば」との想いを語った。続いて、東京都立大学名誉教授で本イベント組織委員会の深尾精一会長は、ここ10年ほどで中高層木造建築への関心は世界中で高まり、日本でもやや遅れてこの4、5年で急速に技術開発や建設が進められていると現状を解説。

そのうえで「木造での高層建築には音や耐震、耐火等の様々な課題があるが、本イベントはそうした課題を日々研究する研究者やプロジェクト関係者等の知見を共有できる場。世界の第一線で活躍するトップクラスの方々に登壇していただく予定なので、木造建築に携わる業界関係者にとっては大変興味深い国際会議になる」と語った。本イベント実行委員会の橋本公博委員長は、「長期的に見ても木造建築はカーボンニュートラル等の重要な要素であり、世界中で木造の中高層建築物はますます盛んになるだろう」とし、本イベントの目指す成果として「まずは日本の参加者に、木造建築分野における世界トップの方々の取組状況や技術等を十分に理解していただきたい」と語った。

そのうえで「木造での高層建築には音や耐震、耐火等の様々な課題があるが、本イベントはそうした課題を日々研究する研究者やプロジェクト関係者等の知見を共有できる場。世界の第一線で活躍するトップクラスの方々に登壇していただく予定なので、木造建築に携わる業界関係者にとっては大変興味深い国際会議になる」と語った。本イベント実行委員会の橋本公博委員長は、「長期的に見ても木造建築はカーボンニュートラル等の重要な要素であり、世界中で木造の中高層建築物はますます盛んになるだろう」とし、本イベントの目指す成果として「まずは日本の参加者に、木造建築分野における世界トップの方々の取組状況や技術等を十分に理解していただきたい」と語った。

## WOODRISE 2021 KYOTO 開催概要

会 期:2021年10月15日～17日

会 場:国立京都国際会館

テーマ:持続可能な開発に向けた木の建築  
～伝統から未来へ～

主 催:一般社団法人 国際建築住宅産業協会

■参加者:約800名(現地・オンライン合計)

■登壇者:15か国 総勢70名

※2022年5月下旬にWOODRISE 2021 BUSINESS SESSIONを開催予定





⑥ 壁面グラフィックやオリジナルムービー、VR 体験で構成された木住協ブース ⑦ VR ムービーを体験中の来場者 ⑧ 木住協 TV に見入る訪問者

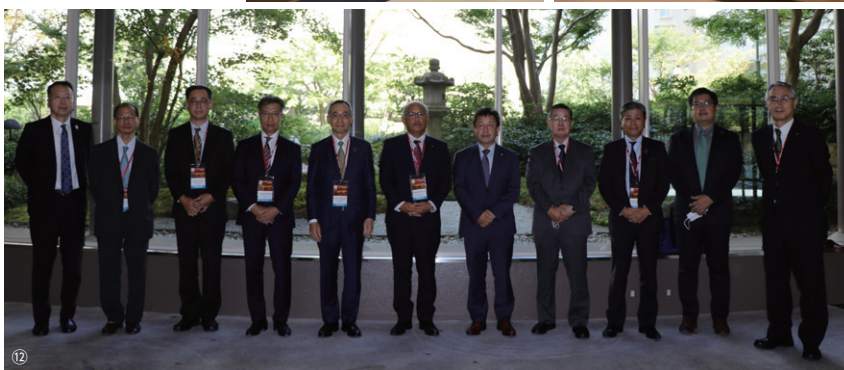
## オリジナルムービー『木住協TV』や 360度 VR 動画で木住協の取組を印象的に訴求

本イベントには、展示会場が設けられ、スポンサー企業など24の企業・団体によるブース出展が行われた。そのひとつとして、木住協もブースを出展。ブース内は、「木造の未来、広がっています」をテーマに、木住協の技術を活かした中大規模木造実例の紹介や、木造を極める技術開発・研究、木造を広める普及啓発・広報、木造を支える人材育成といった木住協の取組を紹介した壁面グラフィックと、オリジナル映像が上映されるモニター、臨場感あふれるVR動画で木造の素晴らしさを体感できるVRムービーコーナーで構成された。

モニターでは、ニュース情報番組風にまとめられた『木住協TV “木住協のすべて”』が随時上映され、屋久島での新庁舎建設計画や東京都のオーガニックカフェ、福島県の実例取材を交えながら木住協の取組を印象的に紹介し、来場者に訴求した。さらに、前述の東京都のカフェや金沢のホテルなど、木住協の開発した技術や取得した認定を活用して

建てられた中規模木造建築の実例を紹介した360度VRムービーが体験できるVRムービーコーナーでは、他のブースにはないコンテンツが来場者の関心を集めていた。

木住協からも、市川晃会長をはじめ、梅木孝範運営委員長、越海興一専務理事と、近畿支部から古川浩支部長（近鉄不動産株式会社）、大西宏副支部長（住友林業株式会社）、今岡宏徳副支部長（大和ハウス工業株式会社）、高山隆一幹事（株式会社昭和工務店）、澤田敏文前支部長（南海不動産株式会社）、北海道支部から中田和仁支部長（株式会社土屋ホーム）、吉戸竜彦氏（同社）が会場視察に訪れ、中大規模木造建築に関する最先端の知見に触れるとともに、互いに意見交換や情報共有し、会員同士の交流を深める貴重な場となった。



⑨ ⑩ 会場内の様子 ⑪ 展示ブース内で行われた各企業によるスポンサードセッションの様子 ⑫ WOODRISE 2021 KYOTO 会場の視察に訪れた木住協本部・支部の皆様





⑬ 建築家 隈研吾氏による記念講演

## 記念講演 講師：隈研吾氏 「木の時代へ」

16日にメインホールで開催され、ひととき多くの参加者が聴講に訪れたのが、「世界で最も影響力のある100人」に選ばれ、世界の木造建築を牽引する建築家の隈研吾氏による記念講演だった。「木の時代へ」のテーマで、木という素材、木造建築に注目し、取り組むようになった経緯や、広重美術館や新国立競技場をはじめ、世界各地でこれまでに設計した作品を当時のエピソードとともに振り返り、各国における木の捉えられ方や利用状況などを交えながら解説した。

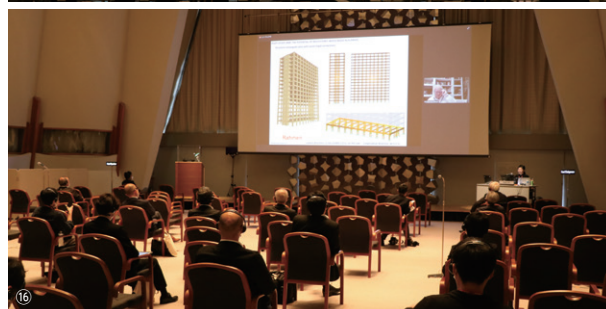
隈氏は、「日本は森林率70%を誇り、木で温かいまちをつくってきた実績があり、これまで蓄積してきた経験や技術が大きな可能性を発揮し、世界中から求められる木の時代が来るはずだ」と述べ、自身の取組も含めて、木と共にある日本の文化・技術が、これから来るべき木の時代に役立つヒントになればとの想いを語った。

## 木材利用の活用・技術的観点・SDGs等の 観点から世界の情報を共有

本イベントでは、16日・17日の2日間にわたり、全体会議とテクニカルワークショップ、特別セッションの3プログ

ラムが行われた。全体会議では「地域活性化、持続可能性への貢献を含めた木造利用の効果・メリット」、「健康や快適さの観点から見た木造利用の効果・メリット」、「プロジェクトの動向、事例紹介」、「公共政策、木造振興施策」、「市場・産業の動向」の5つのテーマに基づき、各モデレーターとスピーカーによる講演が行われた。また、テクニカルワークショップでは、施工技術や工法、防火、耐震性、音の問題、耐久性、木造建築のための森林資源の6つのテーマにおける、技術的な観点でのセッションが行われた。

さらに関連行事として、木造建築、木造住宅の意義や価値をSDGsの視点から捉え直し、SDGsの推進を事業として定義づけ、産業としての新たな展開と振興策の模索するという主旨で「木造建築の振興とSDGsの視点」と題し特別セッションが開催された。加えて、中国、タイ、オーストラリアからスピーカーを招き、住宅建築行政担当者等による住宅始業の状況と行政の取組に関するセッションを「アジア・オセアニアの住宅市場」と題して開催。住宅市場に関する国際的な情報交換が行われた。海外からの参加者を迎えられない状況下ではあったものの、中国をはじめライブ配信でのオンライン参加や、欧米諸国への後日オンデマンド配信が予定されているなど、今できる最大限の工夫で実現した国際会議となり、有意義な成果を残した。



⑮世界中からスピーカーを招いて行われた全体会議 ⑯技術的観点から行われたテクニカルワークショップ ⑰掲示された貴重な資料に関心を寄せる参加者



# 自主統計分析等に関する オンライン記者報告会を開催

木住協は、「令和2年度木住協自主統計および着工統計の分析報告書」の集計がまとまったことを受け、2021年8月25日に在京メディアの報道関係者に対し、オンラインにて記者報告会を開催した。参加した20人弱の報道関係者と、東京・港区六本木の木住協会議室の会場をオンラインでつなぎ、木住協業務・広報部より、自主統計分析報告の集計結果の説明や、WEB講習・デジタル試験による「木造ハウジングコーディネーター資格試験」の実施、「第24回 木のある暮らし作文コンクール」の開催等、直近の木住協の活動状況の報告が行われた。

記者報告会は、越海興一専務理事の挨拶にはじまり、「前年10月の消費増税の影響からどこまで回復できるかという中、令和2年度は中国工場で生産した住宅部品や資材が日本に入っていない状況となり混乱が生じました。またその後、国内で新型コロナウイルス感染症の蔓延を受け、GWに住宅展示場が閉鎖となり、住宅受注にかなり影響が出ました。そこから、本日にいたるまで、感染防止対策の中で、DX対応をはじめとする様々な方法を駆使しながら、なんとか住宅受注の回復に住宅産業界をあけて傾注してきたというところです。令和3年度に入ってから、色々な評価が出てきており、令和2年度からの回復基調がまだ緩やかですが続いていると見受けられます。コロナ以前の状況まで回復できるかは未だ不明ですが、現状は、住宅受注は緩やかに好転しています。こうした状況下で、異例な年だった令和2年度について統計調査を実施しました。逆風の中で日本中の住宅着工数が落ち込んだ中、木住協の会員におきましては非常に頑張っていたのだと我々事務局としては考えております。」と、住宅産業の近況を報告するとともに、コロナ禍での木住協会員の健闘を称えた。

## 木造戸建て住宅の5棟に1棟は 木住協会員が建築

続いて、森剛二業務・広報部長が自主統計の集計結果をもとに木住協会員の着工動向について説明した。以下に当日の説明内容抜粋を記載する。

＜自主統計および住宅着工統計における住宅着工戸数と木住協シェア（対前年度比）＞

[表1]

	区 分	令和2年度 (イ)	令和元年度 (ロ)	前年度比(戸) (イーロ)	前年度比(率)
木住協	住宅着工戸数	86,652	86,031	+ 621	+ 0.7 %
	うち戸建て戸数(B)	82,647	81,216	+ 1,431	+ 1.8 %
	うち木造3階建て戸数(E)	8,650	7,256	+ 1,394	+ 19.2 %
	うち共同住宅戸数	4,005	4,815	▲ 810	▲ 16.8 %
全国	住宅着工戸数	812,164	883,687	▲ 71,523	▲ 8.1 %
	うち戸建て戸数(A)	463,350	518,890	▲ 55,540	▲ 10.7 %
	うち木造戸建て戸数(C)	414,072	459,425	▲ 45,353	▲ 9.9 %
	うち木造3階建て戸数(D)	24,357	29,342	▲ 4,985	▲ 17.0 %
	うち共同住宅戸数	348,814	364,797	▲ 15,983	▲ 4.4 %
	うち木造共同住宅戸数	53,267	54,157	▲ 890	▲ 1.6 %
シェア	木造戸建て住宅に占める木住協シェア(B/ロ)	20.0%	17.7%		+ 2.3 ポイント
	全戸建て住宅に占める木造戸建てシェア(C/A)	89.4%	88.5%		+ 0.9 ポイント
	木造3階建て戸建て住宅に占める木住協シェア(E/D)	35.5%	24.7%		+ 10.8 ポイント

### 【新設住宅着工戸数について】

●調査に回答を寄せた木住協会員による新設住宅着工数は、86,652戸。前年比100.7%となった。

●木造戸建てについては国内実績の前年比89.3%に対し、木住協会員実績は、101.8%。一方、木造共同住宅では、国内実績の対前年比が98.4%に対し、木住協会員実績は83.2%であった。

＜総論＞コロナ禍において全国的に着工戸数の落ち込みが見られたが、木住協会員の新設住宅着工数は、戸建てで健闘、共同住宅で苦戦したという結果に。 [表1参照]

### 【過去5年間の新設木造戸建て住宅着工数の推移について】

●全戸建て住宅着工戸数に占める木造戸建て住宅の割合は高まってきている。(平成28年が85.7%、平成29年度が86.8%、平成30年度87.3%、令和元年度88.5%、令和2年度89.4%)

●木住協会員の木造戸建て着工数はここ5年間大きな変動はなく安定している。 [表2、図1参照]

### 【木造戸建て住宅における木住協シェアの推移について】

●平成28年度の20%をピークに3年連続減少していたが、

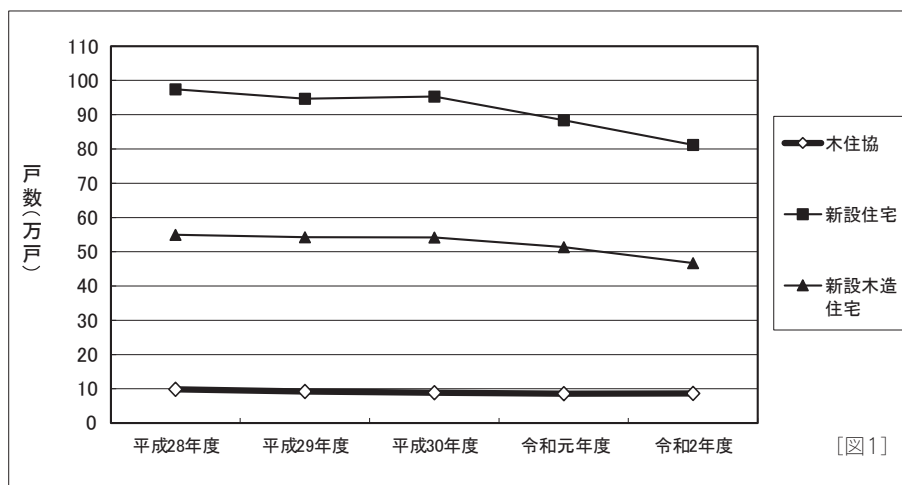


新設住宅着工戸数推移（共同住宅含む）

（戸）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
木住協	98,722	92,361	88,647	86,031	86,652
新設住宅	974,137	946,396	952,936	883,687	812,164
新設木造住宅	549,263	542,202	541,905	513,582	467,339

[表2]



[図1]

令和2年度は4年ぶりに20％台に復活した。

＜総論＞木造戸建て住宅の5棟に1棟が木住協会員が建てたと言える結果に。

#### 【木造3階建て以上戸建住宅における木住協シェアの推移】

●木住協の木造3階建て住宅は8,650戸と5年間で最高戸数となり戸建て住宅の10.5％を占めた。

＜総論＞全国の木造3階建て住宅の35.5％が木住協会員によって建てられている。

#### 【平成28年省エネルギー基準適合住宅の推移について】

●木住協では、28年度の対応率66.7％から5年で、対応率81.2％まで進んでいる。

#### 【戸建て住宅における長期優良住宅の割合推移について】

●木住協の長期優良住宅割合はもともと高比率だが、29年度に40％台となって以降は、30％台後半で推移し令和2年度は34.3％

●全認定長期優良住宅に占める木住協会員企業の認定長期優良住宅の割合は、28.1％

＜総論＞依然長期優良住宅の増加に寄与している。

#### 【ZEH(ニアリーZEHを含む)の着工戸数について】

●ZEH適合住宅は10,877戸で、前年より1,626戸増の

前年比117.6％

●ZEH適合住宅の戸建て住宅に占める比率は13.2％で、前年度より1.8ポイントアップしたが、なお国の目指す「普及率50％」までは届かない [表3参照]

＜総論＞ZEHの普及率の阻害要因を調査し、分析結果を住団連に共有して解決策を検討していきたい。特に補助金の事業期間と工期が合わないという点について課題提起していきたい。

### 昨年に続きオンライン化等により効率的な事業活動を継続

続いて、木住協各事業部から活動トピックスについての報告があり、第21回目を迎える「木造ハウジングコーディネーター資格試験」については、引き続きWEB講習会と、全国100か所以上のテストセンターにおけるデジタル試験の開催が告知された。実績として資格取得者の累計が約6,000人にのぼり、会員企業では資格試験を新人教育カリキュラムとして活用している例もあり、受験者は増加傾向にあると報告した。また、第24回を迎えた「木のある暮らし作文コンクール」については、例年通り国土交通大臣賞・文部科学大臣賞・農林水産大臣賞・環境大臣賞、外務大臣賞と5大臣賞の後援名義を受けることができ、昨年に続き表彰式はオンライン開催となる旨を報告した。

ZEH適合住宅（ニアリーZEH適合住宅を含む）（戸建て）着工戸数

[表3]

		平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
木住協 ZEH適合住宅	戸数 (A)	10,242	17,728	9,648	9,251	10,877
木住協 戸建て住宅戸数	戸数 (B)	94,556	86,618	83,624	81,216	82,647
木住協戸建て住宅に占めるZEH適合住宅シェア (A/B)		10.8%	20.5%	11.5%	11.4%	13.2%



木造3階建て以上の戸建て 前年度比19.2%増の過去最高

## 「令和2年度自主統計および 着工統計の分析報告書」まとまる

平成28年省エネ基準適合住宅も3年連続で80%越え

業務・広報委員会(村岡照生委員長)はこのほど、「令和2年度木住協自主統計および着工統計の分析」結果をまとめ、報告書として発行した。1種A、B、C会員を対象に、令和2年度(令和2年4月～令和3年3月)に建設した木造軸組住宅の住宅着工戸数をアンケート形式で集計したもので、今回で32回目の調査となった。調査結果によると、木造3階建て以上の戸建て戸数が8,650戸と前年度より大幅に増加したほか、平成28年省エネルギー基準適合住宅(平成25年省エネルギー基準適合住宅を含む)が木住協戸建て住宅の81.2%を占め3年連続で80%台となり、長期優良住宅の比率も34.3%と戸建て住宅の3戸に1戸以上を占めるなど、住宅の質向上に貢献していることが分かった。

調査は令和3年5月1日現在の465社の1種会員を対象に実施し、このうち1種A会員99社、同B会員222社、同C会員53社の合計374社から回答を得た。回収率は80.4%となり、前年度より4.2ポイント増えた。その結果、1種会員が建設した木造軸組住宅は戸建て住宅が82,647戸(前年度比1.8増)、共同住宅が4,005戸(前年度比16.8%減)となり、合計では86,652戸(前年度比0.7%増)となった。

国交省がまとめている住宅着工統計に占める1種会員のシェアは20.0%(前年度比2.3ポイントアップ)であり、平成28年度以来の20%越えとなった。木住協の令和2年度の地域別シェアをみると関東が27.0%と最も高く、中部の23.0%、中国の17.1%、四国の15.9%などの順。沖縄は10.4%にダウンしている。

### 木造3階建て戸建ては最高記録

建設戸数のうち木造3階建て以上の戸建て住宅は、前年度比19.2%増の8,650戸と大幅に増加し、調査開始して以来で最高を記録した。住宅着工に占める木造3階建て以上の戸建て住宅は前年度比17.0%の減少で、木住協のシェアは35.5%と大幅に高まった。約3戸に1戸は1種会員が建設したことになる。地域別の木住協シェアは関東53.3%、中部39.3%と高く、反対に近畿が4.1%、中国4.1%、九州5.0%と低い結果になり、地域差が鮮明になった。

戸建て住宅に占める平成28年省エネルギー基準適合住宅は67,127戸で、戸建て住宅の81.2%を占めた。前年度よりも1.4ポイントダウンしたものの、3年連続で80%

台となった。

因みに木住協の戸建て住宅に占める平成28年省エネルギー基準適合住宅の割合は、平成28年度が66.7%、平成29年度が74.2%、平成30年度80.5%、令和元年度82.6%と右肩上がりで推移している。省エネ性能の向上から、1種会員が平成28年省エネルギー基準適合住宅に切り替えを進めていることが窺える。木住協戸建て住宅に占める地域別シェアは、70.3%の沖縄、75.5%の関東を除いた地域で軒並み80%を上回り、近畿、中国では90%を越えていた。業務・広報委員会では「木住協が建設する戸建て住宅は、平成28年省エネルギー基準適合住宅がスタンダードになっている」と分析している。

品確法に基づく設計評価住宅は21,785戸、建設評価住宅は14,748戸で、着工統計の全国戸建て設計評価、建設評価住宅に対する木住協シェアは設計評価住宅が18.9%、建設評価住宅が15.0%といずれも前年度より上昇した。

長期優良住宅の建設戸数(戸建て)は28,318戸となり、木住協戸建て住宅の34.3%を占めた。前年度調査より3.8ポイント低下したものの、1種会員が建設した戸建て住宅の3戸に1戸以上が長期優良住宅で占めたことになり、変わらず質の向上に大きく貢献している。

新設住宅着工に占める長期優良住宅建築等計画の認定戸数は全国で106,628戸となっており、1種会員が建設した長期優良住宅建設戸数は28.1%を占めたことになる。

地域別にみて長期優良住宅のシェアが高かったのは九州の58.5%で、近畿の54.6%、中部の50.3%、東北の38.8%、四国の36.9%と続いていた。逆に低かったのは関東で20.2%だった。



## 新設木造3階建て以上戸建て住宅着工戸数

		平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
新設木造戸建て住宅	戸数 (A)	472,563	462,574	469,467	459,425	414,072
	平成28年度比	100.0	97.9	99.3	97.2	87.6
新設木造3階建て以上戸建て住宅	戸数 (B)	25,884	26,363	27,956	29,342	24,357
	平成28年度比	100.0	101.9	108.0	113.4	94.1
新設木造戸建て住宅に占める 新設木造3階建て以上戸建て住宅の割合 (B/A)		5.5%	5.7%	6.0%	6.4%	5.9%
木住協新設木造3階建て以上 戸建て住宅戸数	戸数 (C)	6,019	3,251	5,699	7,256	8,650
	平成28年度比	100.0	54.0	94.7	120.6	143.7
新設木造3階建て以上戸建て住宅に占める 木住協シェア (C/B)		23.3%	12.3%	20.4%	24.7%	35.5%

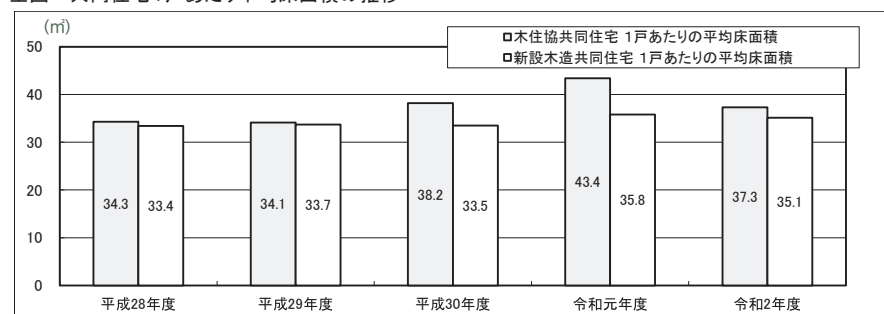
## 木住協戸建住宅における平成28年省エネルギー基準適合住宅（平成25年省エネルギー基準適合住宅を含む）の推移

		平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
木住協戸建て住宅戸数	戸数	94,556	86,618	83,624	81,216	82,647
	平成28年度比	100.0	91.6	88.4	85.9	87.4
平成28年省エネルギー基準 適合住宅戸数	戸数	63,055	64,290	67,349	67,109	67,127
木住協戸建て住宅に占める平成28年省エネ ルギー基準適合住宅シェア		66.7%	74.2%	80.5%	82.6%	81.2%

## 認定長期優良住宅（戸建て）着工戸数

		平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
住宅着工統計 新設住宅（戸建）	戸数 (A)	472,563	462,574	469,467	459,425	414,072
	戸数 (B)	107,202	104,977	108,312	106,613	100,628
住宅着工統計新設住宅（戸建）に占める認定長期優良住宅シェア (B/A)		22.7%	22.7%	23.1%	23.2%	24.3%
木住協戸建て住宅	戸数 (C)	94,556	86,618	83,624	81,216	82,647
	戸数 (D)	31,722	35,413	30,241	30,938	28,318
長期優良住宅建築等計画の認定に占める木住協シェア (D/C)		29.6%	33.7%	27.9%	29.0%	28.1%
木住協戸建て住宅に占める認定長期優良住宅の割合 (D/C)		33.5%	40.9%	36.2%	38.1%	34.3%

## 全国・共同住宅1戸あたり平均床面積の推移



太陽光発電搭載住宅の建設戸数は20,447戸で、戸建て住宅建設戸数の24.7%を占め、前年度調査より4.8ポイント低下した。ZEH(ニアリーZEHを含む)の建設戸数は10,877戸となり、戸建て住宅建設戸数の13.2%を占めたが、前年度調査より1.8ポイント上昇したことになる。ZEH適合住宅の地域別割合は、九州が27.7%と最も高く、四国の25.2%、近畿の20.9%の順で、低かったのは関東の6.4%、沖縄の0.6%だった。

## 共同住宅の平均床面積は 35.1㎡で新設住宅を上回る

一方、木造共同住宅の建設戸数は4,005戸となり、前年度より16.8%減少した。新設木造共同住宅に占める

木住協シェアは7.5%であった。建設戸数のうち平成28年省エネルギー基準適合住宅は2,779戸で共同住宅の69.4%を占め、前年度と比べて12ポイントの減少となっている。

また、共同住宅1戸あたり平均床面積は37.3㎡で、前年度より6.1㎡縮小した。新設住宅着工の平均床面積は35.1㎡で、木住協共同住宅が2.2㎡広い結果になった。木住協共同住宅には一部に「サービス付き高齢者住宅」や「特養施設」などが含まれており、このため床面積が広くなったと思われる。地域別では北海道が65.7㎡で最も広く、次いで中国の60.0㎡、九州の51.8㎡、北陸の44.0㎡、東北の38.2㎡、関東の36.8㎡などの順だった。逆に最も狭かったのは中部の28.8㎡だった。沖縄は共同住宅の着工がゼロだった。

令和2年度  
木住協自主統計および着工統計の分析  
報告書

令和3年8月

一般社団法人  
日本木造住宅産業協会



# 日本の世界遺産 探訪

OGASAWARA ISLANDS

「小笠原諸島」は、2011年に日本で15件目の世界遺産に登録されている。本土からはるか遠く太平洋にポツンと浮かぶ小笠原諸島は、太古からの自然あふれる海洋島で、独自の生態系が進化して固有種が多く存在する。今回の世界遺産探訪は、「東洋のガラパゴス」と呼ばれる奇跡の島々「小笠原諸島」についてご紹介しよう。



# 東京都 小笠原諸島

## 「ボニンブルー」と呼ばれる紺碧の海に浮かぶ太古の島々

東京から南に約1,000km離れた父島、さらに南に50km先にある母島を中心として大小30余りの島々からなる小笠原諸島は、大陸と陸続きになったことがない海洋島として、独自の生態系を形成している。一般の住民がいるのは父島と母島のみでその他は無人島であり、ガイドを伴わないと上陸できない島や、そもそも足を踏み入れることができない島がほとんどである。

小笠原への交通手段は、東京・竹芝桟橋から出航する定期船「おがさわ丸」で、朝10時に出航し、約25時間30分かけて、翌日11時30分に父島・二見港に到着する船便があるのみである。父島には、海水浴が楽しめる遠浅の砂浜が広がる小港海岸、シュノーケリングに適した扇浦海岸など美しいビーチがあり、「ボニンブルー」と呼ばれる紺碧の海には枝サンゴの群生が広がっている。年間を通して、サンゴの隙間を泳げば、たくさんの魚たちとともに美しい海の自然を満喫できる。さらに5～6月の満月前後の夜にはサンゴが一斉に卵を産む「サンゴナイト」に出会えるかもしれない。

もう一つ、父島の観光スポットといえば、通称「ハートロック」と呼ばれる千尋岩である。海に面した約260mの高さの崖の断層部分がハート型に見えるもので、ガイド同行でのトレッキングで間近に見ることができる。亜熱帯の森をゆっくりと歩く約2時間半の道中では小笠原固有の植物を楽しむことができ、観光ポイントの断崖から「ハートロック」を眺めれば山登りの疲れも吹っ飛ばすほどの感動を

味わうことができる。

## サンゴ礁が隆起してできた無人島・南島はまさに南海の楽園

小笠原でしかできない唯一無二の体験をしたいのなら、無人島に上陸できる南島クルージングがオススメ。南島は、父島の南西部に位置する南北に約1.4km・東西に約400mの無人島で、かつて海の中にあったサンゴ礁が地殻変動によって隆起してできたといわれる。国の天然記念物に指定されて、この島への上陸は例年3～10月に1日100人を上限として、植物の種や害虫が持ち込まれないように、上陸の前には靴底周辺を海水で洗い流すことが義務付けられている。

世界の絶景として知られる南島の扇池は、カルスト地形により島の断崖の一部にぽっかりと穴が空いており、この天然のトンネルから透明度の高い海水が湾に入り、真っ白な砂浜をつくりあげている。この砂地には小笠原固有のカタツムリの半化石・ヒロベソカタマイマイが散らばり、砂浜に現れるブルドーザーのような跡は産卵のために上がってきたアオウミガメの足跡なのだそう。まさに南海の楽園といえるこの島の周りにはクジラやイルカが泳ぎ、運が良ければ巨大なクジラがジャンプする姿を見ることができるかも知れない。

### 世界遺産「小笠原諸島」登録概要

構成資産： 聳島列島、父島列島、母島列島、火山(硫黄)列島のうち北硫黄島と南硫黄島、西之島及び一部海域

所在地： 東京都小笠原村

記載年月： 2011(平成23)年6月

区分： 自然

遺産区域： 登録地域 7,939ヘクタール(陸域6,339ヘクタール、海域1,600ヘクタール)

登録理由： 1.陸上、淡水域、沿岸および海洋の生態系、動植物群集の進化や発達において、進行しつつある重要な生態学的・生物学的過程を代表する顕著な例であること。

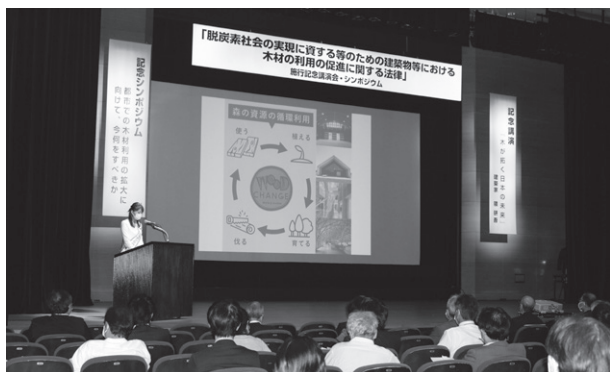
2.学術上、あるいは保全上の観点から見て、顕著で普遍的な価値をもつ、絶滅のおそれがある種を含む、生物の多様性の野生状態における保全にとって、もつとも重要な自然の生息・生育地を含むこと





# 『脱炭素社会の実現に資する等のための建築物等における 木材の利用の促進に関する法律』 施行記念講演会・シンポジウム

2021年10月1日に「脱炭素社会の実現に資する等のための建築物等における木材の利用の促進に関する法律」が施行された。この法律の施行を記念して、国民に法律の趣旨、目的、木材が開く未来の形を広く知ってもらえるようにという目的で、建築家の隈研吾氏をはじめとした有識者による講演会・シンポジウムが10月8日(金)に有楽町朝日ホール(マリオン)にて開催された。世界の木造建築を牽引する隈研吾氏による記念講演にはじまり、木材利用の促進に関わりの深い有識者の皆様による、「都市での木材利用拡大に向けて、今何をすべきか」をテーマにしたシンポジウムが行われ、それぞれの立場から木材利用拡大のための具体策が述べられた。



## 都市の木造化、日本の森林再生の 大きな前進につながる契機に

当日は、本イベントの実行員会委員長である、森林を活かす都市の木造化推進協議会会長、日本林業協会会長の前田直登氏による開会のあいさつにはじまり、「2年前の5月、森林林業・建設業をはじめとする各種団体企業、地方公共団体等に幅広く呼びかけを行い、公共建築物等木材利用促進法改正の働きかけを行って参りました。その結果、先の通常国会におきまして法改正が行われ、10月1日に『脱炭素社会の実現に資する等のための建築物等における木材の利用の促進に関する法律』、いわゆる『都市の木造化推進法』の施行を迎えることができました。本日10月8日は、この法律に定められた『木材利用促進の日』であり、この記念すべき日に、建築物の木材利用の推進を図るとともに、2050年カーボンニュートラルの達成の実現に向けて日本の都市の在り方や森林の未来について語り合う講演会及びシンポジウムを開催させていただきました。本イベントを契機に、この法律の役割について多くの方に受け止めていただき、都市の木造化、また日本の森林の再生が

大きく前進することを強く祈念いたします。」とイベント主旨が語られた。続いて、国会の都合により欠席となった金子原二郎農林水産大臣(木材利用促進本部長)のあいさつを天羽隆林野庁長官が代読し、「戦後造成され成熟期を迎えた森林資源を循環利用していくためには、木材の需要拡大を図ることが重要です。また、木材は建築物等に利用することで炭素を貯蔵でき、他の資材と比べて製造時のCO<sub>2</sub>排出量もすくないため、木材利用の促進は2050年カーボンニュートラルにも貢献します。このため本年6月に公共建築物等木材利用促進法が改正され、この10月から施行されました。この法改正により木材利用促進の対象が公共建築物から建築物一般に拡大されるとともに、10月が木材利用促進月間、本日10月8日が木材利用促進の日と位置付けられたことを受け、建築物における木材利用の促進に向けて官民一体となって国民運動を展開していくこととしております。また、6月に改定した森林・林業基本計画においても林業、木材産業によるグリーン成長の実現に向け、都市部などでの木材利用を促進していくこととしております。今後、政府として公共建築物だけでなく民間建築物もふくめて、より一層の木材利用の取り組みを進めて行く考えです。皆様に木を使うことの意義を改めてご確認いただき、木材利用の機運を高め、森林資源の循環利用に向けて木材の利用が促進することを期待します。」と参加者へのさらなる理解と協力を呼び掛けた。

## 施行記念講演 講師：隈研吾氏 「木は日本の経済・文化を動かす“OS”」

続いて、建築家の隈研吾氏を講師に招き、施行記念講演





記念講演を行った、建築家の隈研吾氏

が行われた。はじめに、自身が木造建築に注目し、手掛けるようになった経緯について、「木の建築について考え始めたのは、バブル崩壊後。当時、東京で仕事がストップしたこともあり、日本各地を回っ

て『日本には木造建築がある』と発見しました。腕の良い木造の職人も、上質な木材もあるのに、木が使われていないという事に90年代に気づき、非常に残念に感じました。そこから木の建築を手掛けるうちに、日本にとって木は基本的な“OS”と言えるのではないかと考えるように。OSとはコンピューターを動かす基本的なソフトですが、日本という国、その文化や経済を回す基本的なOSが実は木なのではないかと思い至りました。」と語った。そして、日本の地方を回った経験と、そこで得た知見の集大成のひとつ、広重美術館のプロジェクトを例に、里山と日本人の暮らしについて解説した。古来、日本人は建築や家具の材料、生活に必要なエネルギー、農業用肥料等、様々な用途で使う木を求め、里山のふもとに集落をつくり、里山に依存する形で生活基盤を築いたとし、それが20世紀に入り、大都市から、電気やガス、肥料や食料が供給される時代に入ると、木と日本人との関係が崩れ、さらに都市の不燃化・耐震化の観点から木が悪者とされる時代が一時期あったと指摘。それが、「今や時代が変わろうとしている」と語った。広重美術館は、木の不燃技術を使って、屋根や壁に地元の木を使用。地元の木を使うことは、輸送時のCO<sub>2</sub>を削減し環境負荷を低減するだけでなく、地元経済(マイクロエコノミー)の活性化や、森林維持にも効果的だとその重要性を訴えた。さらに、スイスやバリ、ブラジル、シドニーなど世界各国で自身が手掛けた建築のプロジェクトや、子どもからお年寄りまで年間100万人以上が集い、利用しているという長岡市役所や、世界の注目を集めた新国立競技場での、都市に

いながら風の抜ける建築手法など、国内外に広がる隈研吾建築の設計コンセプトや、建築時のエピソードについて語った。

## 木の魅力を伝え続ける情報発信力と 安定供給を維持できる体制づくりを

記念講演終了後は、3人のパネリスト(東京海上日動火災保険株式会社相談役およびウッドチェンジ協議会会長 隅修三氏、消費者庁長官 伊藤明子氏、林業漫画家 平田美紗子氏)とコーディネーター(林野庁長官 天羽隆氏)によるシンポジウムが開催された。まずは林業・森林再生を企業人の立場から訴え、時代に先駆けた提言を発信する隅修三氏が発言。中高層オフィスビル・マンション等の木造化を推進する活動の中で、まだまだ木に対するネガティブな印象を持つ日本人の常識を変える必要性を感じていると語り、施主に対し木の優れた性能を訴求することが重要だと話した。また、2023年完成予定の、国産材による世界最大規模の木造ハイブリッド構造高層ビルを目指す東京海上日動ビルについても、今後のモデルケースとして言及した。続いて、木造建築や地域活性化対策に深い知見を有し、持続可能な社会の実現に向けた政策の先導役を果たしている消費者庁の伊藤明子長官が発言。現代の消費者にとって木は「新しく発見する素材」とであると位置づけ、エシカル消費をはじめ近年の消費者意識の変化にマッチするものだと語り、消費者が感覚的にいいものだと感じられるような情報発信がさらに必要だと訴え、さらに木材の生産に関わる関係各所には安定供給の維持をお願いしたいと語った。次に、林野庁・北海道森林管理局職員として、林業技術者かつ女性の視点で漫画やイラストによりわかりやすい情報発信をしている林業漫画家の平田美紗子氏が発言。地域材を使用した自宅リフォーム時の経験や、自身の情報発信活動を通じて、地域材の素晴らしさを知る人や、木を積極的に使いたいと思う人の少なさを痛感し、日本の木・地域材のメリットを語るストーリーテラーが重要であると語った。最後に、天羽隆林野庁長官より、シンポジウムで



有識者によるシンポジウムの様子



時代に先駆けた提言を発信する 隅修三氏

指摘された木材の安定供給維持等の宿題については、林野庁でも十分に検討したいとし、改めて観客及び配信視聴者へ国産材の積極利用への協力を呼び掛けた。



# 全国のテストセンターで 木造HC資格試験を実施

営業・技術編の基礎検定に挑戦して 366 人が合格

今年度で21回目を迎えた木造ハウジングコーディネーター(HC)資格試験が、昨年度に引き続き、全国に設置されているテストセンターにおいて12月1日に実施された。木造HC資格試験には、多数の学生および非会員企業からの受験者を含め、全国で485人がチャレンジ。試験後の12月8日に試験審査会(審査員長=上杉啓・東洋大学名誉教授)を開催し、271点以上(かつ営業編140点以上、技術編126点以上)を得点した366人が晴れて木造ハウジングコーディネーターとして認定された。

木造ハウジングコーディネーター(HC)資格試験は、優秀なコンサルティング能力を有する住まいづくりのエキスパートを育成し、住宅営業職や技術者の社会的評価を高めると同時に、木造住宅業界の健全な発展などを目的に、木住協が2001(平成13)年に制度化した。

資格試験は営業編と技術編とに分かれ、受験者は各200問ずつの計400問に挑戦。今回の資格試験にはWEB配信による講習会を受講した約250人のほか、テキスト購入により自宅や勤務先で試験勉強に取り組んだ人も含め、計485人が受験した。この中には在学中の大学生が例年になく多い54人、また非会員企業の従業員44人が含まれている。

昨年度に引き続き、今年度も全国に設置されたテストセンターのうち、北海道から九州・鹿児島県まで34都道府県、計107箇所の試験会場に分散しての受験方式とした。受験会場となるテストセンターは受験者各々が、移動負担の軽減や利便性を考慮に入れながらネットで簡単に予約できる。受験当日、テストセンターでは、本人確認の後、私物はロッカーに収納。試験室は、パーティションで他と隔離

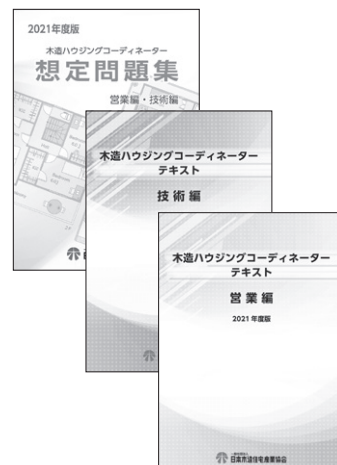
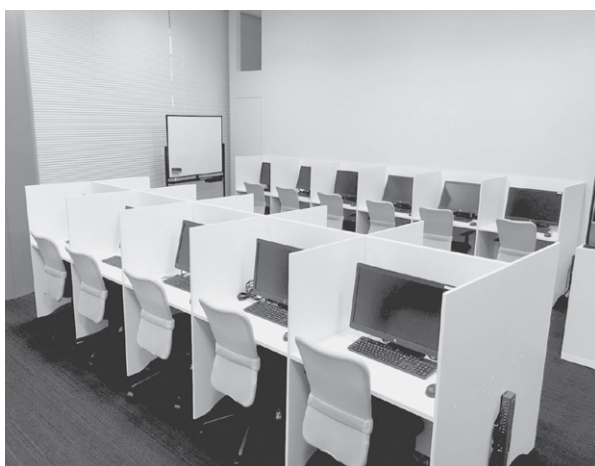
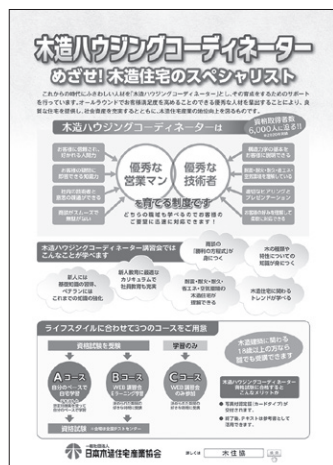
され、試験中は試験官が監視カメラなどにより監視するなど、厳格な運営体制が敷かれていた。

営業編、技術編とも60分間という時間内に、パソコン画面に表示される各200問の設問から二択式で正解をボタンクリックで解答する必要があり、早々と解答を終え退室する受験者がいる一方で、制限時間ぎりぎりまで解答を見直している受験者も多く見られた。

## 約6,400人の木造HCが全国で活躍

試験審査会では両編で271点以上(かつ営業編140点以上、技術編126点以上)を得点した受験者を合格させることに決めた。最高得点は396点、366人が合格した。合格率は75.5%と前回試験より1.3ポイント低下した。平均点は306.7点で、前回よりも約3点上回った。

木住協では上位得点者の成績優秀者表彰式をオンラインにて開催することとしている。今回の合格者を加えると、木造ハウジングコーディネーターの資格認定者は延べ6,347人に増え、全国の会員企業などで活躍している。





# 災害時における木造応急仮設住宅建設 兵庫県・神戸市との応急仮設住宅の 建設に関する協定締結について

一般社団法人日本木造住宅産業協会以下、木住協は、令和4年1月7日、災害救助法に規定する応急仮設住宅の建設協定を兵庫県・神戸市との間で締結いたしました。これは、兵庫県地域防災計画に基づき、木造住宅による応急仮設住宅を迅速に建設するための協力体制を確立するものです。

木住協が、各都道府県・市町村との間で災害時における応急仮設住宅の建設協定を締結するのは、下記の都府県に続き、兵庫県・神戸市が18件目となります。

木住協では、47都道府県すべてにおいて同協定の締結を目指しており、今後も準備の整った道府県から順次、協定締結を行って参ります。本締結につきましては、当協会ホームページにて報告させていただきます。

## 記

1. 締結日：令和4年1月7日(金)

2. 締結者：兵庫県 知事 齋藤 元彦

神戸市長 久元 喜造

(一社)日本木造住宅産業協会 会長 市川 晃

3. 内 容：災害救助法に基づく県・市町村からの要請に応じて、木造応急仮設住宅の供給に際し、木住協会員である住宅建設業者のあっせん等の協力を行う。

4. 締結済：静岡県・福岡県・熊本県・和歌山県・神奈川県・山形県・大阪府・愛媛県・  
岐阜県・徳島県・高知県・香川県・三重県・東京都・佐賀県・長崎県・愛知県  
計17都府県・締結順

災害時における応急仮設住宅の建設に関する協定書

(協 定)

第1条 この協定は、災害時における応急仮設住宅（以下「仮設」という。）の建設に關して、兵庫県（以下「県」という。）及び神戸市（以下「市」という。）と、（一社）日本木造住宅産業協会（以下「協会」という。）とが協定するものとする。

(協 定)

第2条 この協定において「仮設」とは、災害救助法（昭和22年法律第118号）第4条第1項第1号に規定する応急仮設住宅のうち、建設し供出するものをいう。

第3条 「仮設」は、災害救助法第2条の2第1項に規定する仮設施設をいう。

(協 定)

第4条 甲は、仮設の建設に關しては、建設費、戸数、面積、竣工期日、その他必要と認める事項を、書面をもって市に連絡するものとし、乙は、甲の連絡を受けた甲は、第8条第1項の協定の趣旨を踏まえ、建設費、戸数、面積、竣工期日、その他必要と認める事項を、書面をもって市に連絡するものとする。ただし、緊急の場合は、当該書面に書添えて電話等によることができる。この場合において、乙は甲に、それぞれ当該書面を速やかに提出しなければならない。

第5条 県内において災害救助法の適用を受け本市が乙のふである場合は、県内に於ては、仮設の建設に關しては、建設費、戸数、面積、竣工期日、その他必要と認める事項を、書面をもって市に連絡することとする。ただし、緊急の場合は、当該書面に書添えて電話等によることができる。この場合において、後に当該書面を速やかに市に提出しなければならない。

第6条 前項の場合、乙は当該協定を締結した旨を速やかに市に連絡するものとし、甲は、第8条第1項の協定の趣旨を踏まえ、建設費、戸数、面積、竣工期日、その他必要と認める事項を、書面をもって市に連絡することとする。ただし、緊急の場合は、当該書面に書添えて電話等によることができる。この場合において、乙は甲に、それぞれ当該書面を速やかに市に提出しなければならない。

(協 定)

第7条 甲は、協定の趣旨が正かつ内容に於けるよう連絡調整を行い、乙は甲の調整の下で、丙との連絡調整をとるものとする。

第8条 乙は丙は、連絡調整をとるための連絡調整を甲に求めることができる。

(協 定)

第9条 丙は、仮設の建設に關して、協定できる建設費等の状況を毎年1回甲及び乙に報告するものとする。ただし、甲又は乙が必要と認めた場合は、丙に對し随時報告を求めることができる。

(協 定)

第10条 丙は、この協定に係る丙の建設費等及び丙の会員である事業者の人数を毎年1回甲及び乙に報告するものとし、当該報告に記載された者に異議があった場合は、甲及び乙に報告するものとする。

(協 定)

第11条 この協定に定めるもののほか必要な事項については、その協定甲乙丙協定のうえ定めるものとする。

(協 定)

第12条 この協定は、令和4年1月7日から適用する。

第13条 乙が、建設費等の協定を取り消された場合、乙に係る協定については、失効する。

この協定の成立を証するため、本書3通を作成し、甲乙丙記名捺印のうえ、各1通を保有する。

令和4年1月7日

甲 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目1番1号  
兵庫県知事 齋藤 元彦

乙 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目3番3号  
神戸市長 久元 喜造

丙 東京都港区六本木一丁目7番27号  
一般社団法人日本木造住宅産業協会  
会長 市川 晃



## 新規会員紹介

2021年6月から2021年12月までに入会されました企業を紹介します。みなさん、よろしくお願いします。

### アイジー工業(株)

2種B正会員

営業部部长 小形 満

金属外装材の専門メーカーである。商品として、住宅新築、住宅リフォーム、非住宅(S造)に対応する外装材を多数ラインナップしている。

〒101-0065 東京都千代田区西神田3-1-6

日本弓道会ビル6階

TEL : 03-3556-0341 FAX : 03-3556-0342

<https://www.igkogyo.co.jp>

### (有)グッドライフ黒田工務所

1種C正会員

代表取締役 黒田 陽亮

代々受け継ぐ職人技術で、ゆっくり丁寧に創る家づくりを続けている地域に根差した工務店です。

〒991-0061 山形県寒河江市中央工業団地173

TEL : 0237-86-1008 FAX : 0237-86-0088

<http://good-kuroda.jp/>

### (有)池田建築店

1種B正会員

代表取締役 池田 佐保

地場産材(秋田スギ)の無垢材を使用した高性能で環境負荷の少ないサステナブルな住宅づくりを提案しております。

〒016-0879 秋田県能代市不老岱33-2

TEL : 0185-52-6009 FAX : 0185-52-1691

<https://ikedas16.com>

### (株)NEO

1種A正会員

代表取締役 赤崎 広久

自由設計はもちろんのこと、“超”高気密・高断熱で快適×健康×エコな住まいを提供いたします。

〒891-0115 鹿児島県鹿児島市東開町3-77

TEL : 099-298-9300 FAX : 099-298-9166

<https://www.neo-ecolife.com>

### (株)WELLNEST HOME

1種A正会員

代表取締役社長 芝山 さゆり

世界レベルの省エネの実現、健康で快適な「本当にお客様に喜ばれる家づくり」に取り組んでいます。

〒467-0027 愛知県名古屋市瑞穂区田辺通1-1

TEL : 052-875-7737

<https://wellnesthome.jp>

### (株)中広地所

1種B正会員

代表取締役 中広 久

住宅建築のプロ集団として『幸福度の高い住宅とは?』という家づくりを原点に、常にアップグレードして取り組んでいます。

〒910-0006 福井県福井市中央2-2-22

TEL : 0776-27-4500 FAX : 0776-27-4547

<https://www.nstyle.info/>

### (株)Dテクネ

1種C正会員

代表取締役 山中 英樹

建築業界30年 木造住宅の設計、施工を中心に、地域の皆様に喜んでいただける建物をお約束いたします。

〒221-0801 神奈川県横浜市神奈川区神大寺3-1-36

TEL : 045-620-9872 FAX : 045-620-9873

<https://www.dtechne.jp>

### (株)マイハウス

1種C正会員

代表取締役 森川 まさ子

規格住宅の新築工事、既存住宅をマイハウスプロデュースでリノベーションした住宅の販売「リノベの家」を中心に活動しています。

〒851-2102 長崎県西彼杵郡時津町浜田郷562-5

TEL : 095-894-9997 FAX : 095-894-9998

<https://myhouse0120.com>



**(株)フェザーホーム**

1種C正会員

代表取締役 千田 侑也

「家を建てるだけのハウスメーカーとしてではなくライフメーカーとして皆様の人生を描く」笑顔の暮らしを創造する会社です。

〒001-0037 北海道札幌市北区北三十七条西4-3-12

藤井ビルN37 2階

TEL : 011-214-9965 FAX : 011-214-9983

<https://www.featherhome.co.jp>**福建住宅(株)**

1種B正会員

代表取締役 大城 寛雅

外断熱・二重通気工法でつくるソーラーサーキットの家をはじめとして、住み心地第一の家づくりをしています。

〒811-1313 福岡県福岡市南区日佐5-12-1

TEL : 092-593-7000 FAX : 092-593-6099

<https://ie-daisuki.com/>**(株)みらいアーキテクト**

1種C正会員

代表取締役 餌打 大輔

神奈川を中心に木造戸建て住宅の建設を請け負う工務店です。お客様からのご依頼で設計から工事まで一貫して行っています。

〒221-0842 神奈川県横浜市神奈川区泉町17-1

第一泉ビル5階

TEL : 045-548-5503 FAX : 045-548-5504

<https://www.mirai-a.jp>**(一社)住宅あんしん検査**

賛助会員

理事 松井 正也

住宅の検査業務等を通じて良質な既存住宅の流通に貢献します。

〒104-0031 東京都中央区京橋1-6-1

三井住友海上テプコビル6階

TEL : 03-6824-9444 FAX : 03-3562-8031

<https://www.anshinkensa.or.jp>**(株)幸三建設**

1種B正会員

代表取締役 小田 幸三

無垢材を使用した住宅、リフォーム工事を県内にて手掛けております。

〒514-0804 三重県津市上井財町津興2871

TEL : 059-224-0035 FAX : 059-225-0834

<https://kousankensetsu.com/>**ハーバーハウス(株)**

1種B正会員

代表取締役社長 石村 良明

断熱性、耐震性にも優れた完全自由設計のデザイン注文住宅をコミコミ価格1,000万円台から提供しています。

〒950-0871 新潟県新潟市東区山木戸3-6-15

TEL : 025-250-5022 FAX : 025-384-4101

<https://www.herbarhouse.jp/>**田島ルーフィング(株)**

1種B正会員

取締役 住建営業部部长 岩永 慎二

防水材料、屋根葺材、床材の製造及び販売

〒101-8575 東京都千代田区岩本町3-11-13

田島ビル4階

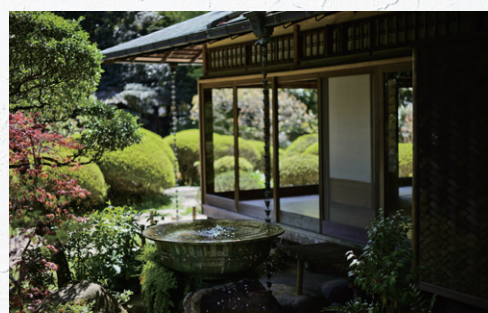
TEL : 03-5821-7713 FAX : 03-5821-2180

<https://tajima.jp>**【編集後記】**

新春を迎え、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。2022(令和4)年になっても、なお新型コロナウイルス感染症の猛威は収まらず、会員の皆様におかれましては、新常态(ニューノーマル)への対応に大変なご努力・ご苦労をなさっていることと推察いたします。日頃は、当協会運営に対し多大なご支援、ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、当冊子の編集活動も思うようにできず、秋号も発刊できず、誠に申し訳ありません。また、連載記事の「頑張る企業訪問記」「リフォーム最前線」「木造ハウジングコーディネーター奮闘記」「税務談話室」、ならびに「支部だより」につきましては、休載させていただきます。今年も、当冊子を通じて木住協の様々な活動について有益な情報をお届けしてまいりますので、何卒よろしく願いいたします。(森)





〈神奈川県箱根町〉

## 旧岩崎彌之助別邸和館

古くからの温泉保養地である箱根に、近代日本の和風別荘建築の原点ともいえる遺構がある。三菱財閥の二代総帥であった岩崎彌之助が欧米旅行の際に訪れたスイスの保養地の景観に感激して、帰国後すぐに明治を代表する建築家 清水仁三郎に設計を委ねた。これが、「旧岩崎彌之助別邸和館」である。一万坪にも及ぶ広大な池泉回遊式庭園は「山月園」と呼ばれ、大きな池の水は近くを流れる須雲川から引き入れ、その周囲に園路を巡らして、築山、池中に設けた小島、橋、名石などで各地の景勝などを再現した。この池のほとりに建てたのが、入母屋棧瓦葺、銅板葺四方下屋付きの木造平屋建ての和風別荘であった。

あえて「和館」と呼ぶのは、隣にイギリス人建築家 ジョサイア・コンドルが設計した「洋館」が建てられたためである。こちらは、庭園の池のほとりに建つ瀟洒なヴィラ風の煉瓦造り西洋建築で、国内外の要人を招く迎賓館として使われた。関東大震災で「洋館」は倒壊したが、美しい庭園と和風別荘は残り、戦後の財閥解体の折に売却され、現在は、箱根の吉池旅館の所有となっている。

### 旧岩崎彌之助別邸和館 国登録有形文化財

建 築	明治37(1904)年
所 在 地	〒250-0311 神奈川県足柄下郡箱根町湯本597
電 話	0460-85-5711(吉池旅館)
入 園 料	大人・高校生500円 中・小学生200円 小学生未満無料
所有管理	吉池旅館

<http://www.mokujukyo.or.jp>



一般社団法人  
日本木造住宅産業協会



木 芽 2022年1月28日発行

Vol.180

発行人 越海 興一 編集 業務・広報部  
〒106-0032 東京都港区六本木1-7-27 全特六本木ビル WEST棟2階  
電 話 03(5114)3010(代) FAX 03(5114)3020